

# 鳥類



## 山口県の鳥類の概要

本州の最西端に位置する山口県は、瀬戸内海、響灘、日本海と三方を海に接し、海岸線の総延長は673 kmと全国屈指の複雑かつ長い海岸線を持っており、島嶼も多い。一方山地については、中国山脈の西端に位置し広島・島根県境である本県の北東部で急に低くなっており、寂地山 1337m、小五郎山 1162m、羅漢山 1109m、平家ヶ岳 1066m、鬼ヶ城山 1031m、筋ヶ岳 1004m など標高 1000m を超える山地は山口県内ではこの地域だけであり、西部では大部分は低い高原状山地、丘陵性台地と平地によって占められている<sup>(1)</sup>。

県内には、鳥類の生息に適した多様な環境があることや、中国や朝鮮半島とも近く、渡りのコースにもなっていることから渡り鳥の渡来も多い。

山口県内で記録された鳥類は、2017年2月現在で21目73科404種にものぼり、このうち写真記録のあるものは21目69科375種である<sup>(2-3)</sup>。また、山口県で繁殖確認あるいは繁殖の可能性のある鳥類は、17目46科104種が記録されている<sup>(4)</sup>。この他に自然分布しない場所に人為的に導入された種(外来鳥)として8目11科31種が報告されている<sup>(5)</sup>。

2002年にレッドデータブックやまぐち<sup>(6)</sup>が発刊された時点の山口県産鳥類目録<sup>(7-8)</sup>では18目66科374種、山口県産繁殖鳥類リスト<sup>(9-10)</sup>は14目38科92種であり大幅に増加している。これは我が国の鳥類学の発展や詳細な識別図鑑の刊行、高性能な撮影機材の普及やバーダーの識別能力の向上によるところが大きい。

このように、山口県には多くの鳥類が生息し繁殖するが、近年繁殖が記録されなくなったものや、生息数が減少した種も少なくない。そこで、山口県に生息する生物(鳥類)を永く未来に引き継いでいくためにも、その現状を調査・分析し、減少傾向が著しい種、絶滅のおそれのある種を山口県版レッドデータブックの掲載種としてリストアップし、保護対策を講じることの意義は大きい。

このような観点から前回、2002年のレッドデータブックやまぐち<sup>(6)</sup>では、鳥類については102種が選定された。内訳は絶滅種(EX)2種、絶滅危惧ⅠA類(CR)11種、絶滅危惧ⅠB類(EN)4種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)22種、準絶滅危惧種(NT)63種であった。

今回、改訂版のレッドデータブックやまぐち 2019 を作成するにあたって、鳥類専門部会では環境省<sup>(11)</sup>が示したレッドリストカテゴリーと判定基準による定量的要件、定性的要件に準拠する様に努めた。そのための基礎資料として文献調査と現地調査を行った。文献調査では日本野鳥の会山口県支部が継続収集している野鳥観察情報のデータベースや継続調査している春と秋の渡り期におけるシギ・チドリ類県内一斉調査、同じくガン・カモ・ハクチョウ類県内一斉調査、探鳥会記録、会誌の山口野鳥、やまぐち野鳥だより、県自然保護課の実施した鳥獣保護区等設定効果調査結果、傷病鳥保護業務実績報告等も参考とした。現地調査では山口県内全域を対象に国土地理院発行の1/25,000地形図を上下、左右4等分した区画を単位とした約300地点について、鳥類の繁殖期にあたる4~8月、越冬期の12~2月の時期にそれぞれ最低各1回の調査を実施した。同様な調査は繁殖期については1990年代、2000年代と過去2回の実施、越冬期については2000年代に行っており、これ等の情報と今回の調査結果を繁殖分布地図、冬鳥生息地図化して比較した。

以上の結果をもとに選定した改訂版のレッドデータブックやまぐち 2019 の鳥類は別記の104種である。内訳は絶滅(EX)として古文書に記載<sup>(12-18)</sup>の残るトキ1種、絶滅危惧ⅠA類(CR)は山口県の県鳥のナベヅルやブッポウソウ等11種、絶滅危惧ⅠB類(EN)は食物連鎖の頂点に立つ森林性のクマ

タカ、減少傾向が極めて顕著なヤマドリ等5種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）はツクシガモ、ズグロカモメ、カラスバト等の他、かつては里山の代表的な夏鳥のサシバや河原や砂州でよく見られたシロチドリを含む28種、準絶滅危惧種（NT）は57種で、湖沼を代表するカイツブリ、水田や畑地帯に見られるタマシギ、ヒバリ、夏鳥のササゴイ、カッコウ、オオヨシキリ、アオバズク、冬鳥のマガン、ヨシガモ、ツリスガラ、オオジュリン等が調査によって減少傾向が確認されたため選定された。情報不足（DD）は2種である。

掲載種リストの変更点は、リストからの除外種はなく、新たにミソサザイ、オオジュリンの2種を準絶滅危惧種（NT）として追加。カテゴリーの変更種は大正時代以降記録の無かったタンチョウが2007-2008年に幼鳥1羽が飛来越冬<sup>(2)</sup>したことで絶滅種（EX）→絶滅危惧ⅠA類（CR）に変更、チュウヒを絶滅危惧Ⅱ類（VU）→絶滅危惧ⅠB類（EN）に変更、準絶滅危惧種（NT）→絶滅危惧Ⅱ類（VU）の変更がウズラ、オオミズナギドリ、ヨシゴイ、ミゾゴイ、クロサギ、ハチクマ、ヤマセミの7種、情報不足（DD）としてヒメクロウミツバメとアカモズの2種である。

環境別に掲載種を概観すると、商業施設の建設や宅地化、太陽光等の再生可能エネルギー施設の建設等で県内での減少傾向が著しいヨシ原に生息するチュウヒ、ハイイロチュウヒ、ヨシゴイ、ヒクイナ、オオヨシキリ、オオジュリン、ツリスガラ、ホオアカ。ハス田などの湿地や干潟に渡り期に渡来するヘラシギ、アカアシシギ、セイタカシギ、ホウロクシギや、越冬のためにやって来るヘラサギ、クロツラヘラサギ、マガン、ヨシガモ、ツクシガモ、ズグロカモメ。これらの場所は埋め立てられ宅地、工業用地、農地等になり、最近ではそれらの場所にも太陽光の再生可能エネルギー施設が建設され始め、次々と消失している。湖沼に生息するカイツブリ、トモエガモ、オオバン。越冬のためダム湖等に飛来するオシドリ。ここでは富栄養化、ブラックバス等の外来魚の侵入、湖沼への釣りのためのボートの乗り入れ等が、個体数の減少や餌資源の減少、生息環境の悪化をまねいている。河川上流部のアカショウビン、ヤマセミ、カワガラス、ミソサザイ。中下流域のシロチドリ、イカルチドリ、コアジサシ。護岸のコンクリート化が進み、特に中下流域では自然のままの所はほとんど無くなっている。水田・畑のチュウサギ、ヒバリ、ヒクイ、マガン、タマシギ、ナベヅル。農薬使用による餌資源の減少や生物濃縮、減反による荒廃は特に山間の棚田で著しい。里山のサシバ、オオタカ、ヤマドリ、ノスリ。農業・林業従事者の高齢化等による荒廃やマツクイムシ等による営巣に適した壮齢樹の減少。山地にはクマタカ、ハチクマ、ブッポウソウ、サンコウチョウ、オオルリ、センダイムシクイ、サンショウクイ、ヤイロチョウ。営巣木の減少等の他、夏鳥の多くは越冬地である東南アジアの大規模な森林伐採等の環境破壊による減少も一因と考えられる。島嶼・岩礁ではカラスバト、オオミズナギドリ、クロサギ、ミサゴ、ウミネコ等の繁殖が確認され、ヒメウ、ミヤコドリなどが越冬しており、比較的良好な状況が維持されているが、釣等で気付かないうちに人が営巣環境に入り繁殖を阻害する可能性がある。また、島嶼環境の変化やイノシシや捕食性の哺乳類、例えばクマネズミ、は虫類等が島に侵入した場合には、営巣環境の破壊や雛や卵の捕食により個体数の激減が予想される。

このように、レッドデータブック掲載種の中には、つい最近まで身近だった野鳥も数多く含まれている。山口県版のレッドデータブックが改訂された機会に、選定された種を含めた多様な生物が生息できる豊かな環境を保全する効果的な保護策が実施されることを期待したい。

最後に、レッドデータブックの掲載種の選定にあたり、現地調査、文献調査にご協力いただいた日本野鳥の会山口県支部の会員の方々、観察記録や写真の提供をいただいた多くの方々の協力に対し、この場を借りてお礼申し上げます。

【執筆者：小林 繁樹】

【鳥類】山口県レッドリスト2018 (分類群順)

●絶滅(EX) 1種

トキ

*Nipponia nippon*

●絶滅危惧ⅠA類(CR) 11種

コウノトリ

*Ciconia boyciana*

サンカノゴイ

*Botaurus stellaris*

マナヅル

*Grus vipio*

タンチョウ

*Grus japonensis*

ナベヅル

*Grus monacha*

コシャクシギ

*Numenius minutus*

カラフトアオアシシギ

*Tringa guttifer*

ヘラシギ

*Eurynorhynchus pygmeus*

ウミスズメ

*Synthliboramphus antiquus*

カンムリウミスズメ

*Synthliboramphus wumizusume*

ブッポウソウ

*Eurystomus orientalis*

●絶滅危惧ⅠB類(EN) 5種

ヤマドリ

*Syrnaticus soemmerringii*

セイタカシギ

*Himantopus himantopus*

チュウヒ

*Circus spilonotus*

クマタカ

*Nisaetus nipalensis*

ヤイロチョウ

*Pitta nympha*

●絶滅危惧Ⅱ類(VU) 28種

ウズラ

*Coturnix japonica*

サカツラガン

*Anser cygnoides*

ヒシクイ

*Anser fabalis*

コクガン

*Branta bernicla*

コハクチョウ

*Cygnus columbianus*

ツクシガモ

*Tadorna tadorna*

トモエガモ

*Anas formosa*

カラスバト

*Columba janthina*

オオミズナギドリ

*Calonectris leucomelas*

ヨシゴイ

*Ixobrychus sinensis*

ミゾゴイ

*Gorsachius goisagi*

チュウサギ

*Egretta intermedia*

クロサギ

*Egretta sacra*

カラシラサギ

*Egretta eulophotes*

ヘラサギ

*Platalea leucorodia*

クロツラヘラサギ

*Platalea minor*

シロチドリ

*Charadrius alexandrinus*

ホウロクシギ

*Numenius madagascariensis*

アカアシシギ

*Tringa totanus*

ツバメチドリ

*Glareola maldivarum*

ズグロカモメ

*Larus saundersi*

コアジサシ

*Sterna albifrons*

ハチクマ

*Pernis ptilorhynchus*

オオタカ

*Accipiter gentilis*

サシバ

*Butastur indicus*

アカショウビン

*Halcyon coromanda*

ヤマセミ

*Megaceryle lugubris*

ハヤブサ

*Falco peregrinus*

●準絶滅危惧(NT) 57種

マガン

*Anser albifrons*

オオハクチョウ

*Cygnus cygnus*

オシドリ

*Aix galericulata*

ヨシガモ

*Anas falcata*

カワアイサ  
カイツブリ  
ヒメウ  
オオヨシゴイ  
ササゴイ  
ヒクイナ  
オオバン  
ジュウイチ  
カッコウ  
ヨタカ  
アマツバメ  
ケリ  
イカルチドリ  
ミヤコドリ  
ヤマシギ  
シベリアオオハシシギ  
タマシギ  
ウミネコ  
ミサゴ  
ハイイロチュウヒ  
ツミ  
ハイタカ  
ノスリ  
オオコノハズク  
コノハズク  
フクロウ  
アオバズク  
トラフズク  
コミミズク  
オオアカゲラ  
アカゲラ  
チョウゲンボウ  
コチョウゲンボウ  
サンショウクイ  
サンコウチョウ  
ツリスガラ  
コガラ  
ヒガラ  
ヒバリ  
センダイムシクイ  
オオヨシキリ  
ゴジュウカラ  
ミソサザイ  
カワガラス  
トラツグミ  
クロツグミ  
コマドリ  
コルリ  
コサメビタキ  
オオルリ  
ホオアカ  
クロジ  
オオジュリン

●情報不足(DD) 2種

ヒメクロウミツバメ  
アカモズ

*Mergus merganser*  
*Tachybaptus ruficollis*  
*Phalacrocorax pelagicus*  
*Ixobrychus eurhythmus*  
*Butorides striata*  
*Porzana fusca*  
*Fulica atra*  
*Hierococcyx hyperythrus*  
*Cuculus canorus*  
*Caprimulgus indicus*  
*Apus pacificus*  
*Vanellus cinereus*  
*Charadrius placidus*  
*Haematopus ostralegus*  
*Scolopax rusticola*  
*Limnodromus semipalmatus*  
*Rostratula benghalensis*  
*Larus crassirostris*  
*Pandion haliaetus*  
*Circus cyaneus*  
*Accipiter gularis*  
*Accipiter nisus*  
*Buteo buteo*  
*Otus lempiji*  
*Otus sunia*  
*Strix uralensis*  
*Ninox scutulata*  
*Asio otus*  
*Asio flammeus*  
*Dendrocopos leucotos*  
*Dendrocopos major*  
*Falco tinnunculus*  
*Falco columbarius*  
*Pericrocotus divaricatus*  
*Terpsiphone atrocaudata*  
*Remiz pendulinus*  
*Poecile montanus*  
*Periparus ater*  
*Alauda arvensis*  
*Phylloscopus coronatus*  
*Acrocephalus orientalis*  
*Sitta europaea*  
*Troglodytes troglodytes*  
*Cinclus pallasii*  
*Zoothera dauma*  
*Turdus cardis*  
*Luscinia akahige*  
*Luscinia cyane*  
*Muscicapa dauurica*  
*Cyanoptila cyanomelana*  
*Emberiza fucata*  
*Emberiza variabilis*  
*Emberiza schoeniclus*

*Oceanodroma monorhis*  
*Lanius cristatus*

ペリカン目 トキ科 0200900300200 <b>トキ</b> <i>Nipponia nippon</i> (Temminck, 1835)	カテゴリ		
	山口県	2018	EX
		2002	EX
	環境省	2019	CR

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長765mm。下に曲がった長い嘴をもつ大型の水辺の鳥。足は比較的短い。頭は白、額、目先、目の周囲、喉は赤い皮膚が裸出。後頭の羽毛は伸びてうすい橙紅色を帯びた冠羽となり、背、肩、腰、上尾筒は白色で各羽の基部は淡橙紅色。風切、雨覆、尾は白色で淡橙紅色を帯びる。胸、腹、脇は白色。嘴は先端と基部は赤、他は黒。足は赤褐色。生殖羽では冠羽、頸、背、肩羽、雨覆等は灰黒色を帯びる。。広葉樹の大木の枝上に小枝や枯れつる等で皿形の巣をつくる。1巣卵数2-3個<sup>(19)</sup>。

NO IMAGE

### 生息・生育状況

繁殖地は中国陝西省洋県のみ。かつては日本各地に生息。明治以降激減。1981年佐渡島の捕獲を最後に野生個体絶滅、2003年飼育下の個体死亡で日本産トキは絶滅。その後保護増殖の為に中国から受け入れた個体で人工増殖に成功。2008年から佐渡で野生復帰に向け放鳥。保護増殖と野生復帰事業を継続中<sup>(20)</sup>。

### 選定理由

古い文献(12-18)に山口県内各地(椿西分、深川村、小串村、宇部村、川上村、波野村、麻郷、大賀村)の記録があり留鳥或いは冬鳥として生息、飛来していたと思われるが19世紀以降の記録はない。

### 減少等の要因

明治時代以前は北海道から九州まで広く分布。明治時代以降乱獲や農薬による餌資源の減少、山間部の水田消失等で個体数が減少。1981年野生絶滅、2003年飼育下個体死亡で日本産トキ絶滅<sup>(1)</sup>。

- 66 -

コウノトリ目 コウノトリ科 0200700100200 <b>コウノトリ</b> <i>Ciconia boyciana</i> Swinhoe, 1873	カテゴリ		
	山口県	2018	CR
		2002	CR
	環境省	2019	CR

### 形態・生態

【執筆者：原田 量介】

全長約1100mm。太くて長い嘴をもった水鳥。ツルによく間違われるが、ツルよりも嘴は太くて長い。体の大部分は白く、長い足は淡赤色。初列風切、次列風切は黒く、大雨覆、初列雨覆、小翼羽も黒いため、飛んだとき翼の前側は白く、後側は黒くはっきりと分かれる。目の周囲は少し皮膚が露出して赤い。鳴き声は出さず、上下の嘴を打ち合わせてカタカタと音を出す。広い水田や川、湖沼で魚、カエル、ドジョウなどを主食とするが、トカゲ、ネズミ、ヘビ、ザリガニ、昆虫なども食べる。松の大木や電柱、人工鉄塔などに営巣する<sup>(21)</sup>。



提供：原田 量介(2015.12.5撮影)

### 生息・生育状況

ヨーロッパ中部及び南部、イベリア半島、アフリカ北部、トルコ、イラン、パミール高原付近、ウスリー、中国東北部、朝鮮で繁殖。かつては日本にも留鳥として生息し繁殖していたが、1971年に野生の個体は絶滅した。大陸産の個体がまれに飛来。兵庫県豊岡市では人工繁殖で増えた個体を放鳥<sup>(1)</sup>している。

### 選定理由

明治以前には全国に分布、山口県内でも岩国城山での繁殖記録<sup>(22)</sup>があるが、日本産の個体は1971年に絶滅した。極まれに大陸産と思われる個体の飛来記録はあるが山口県内では定期的な飛来はない。

### 減少等の要因

農薬によるエサ生物の汚染、生息数の減少による近親交配による弊害などに加え、生息環境の悪化が追い打ちをかけて絶滅したと考えられる<sup>(21)</sup>。

- 67 -

ペリカン目 サギ科 0200900200100 <b>サンカノゴイ</b> <i>Botaurus stellaris</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	CR
		2002	CR
	環境省	2019	EN

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長700mm。羽色は雌雄で似ているが、通常雄より雌はやや小さい。上面は黄褐色で濃い褐色の斑があり、下面は淡く大きな褐色の縦斑がある。頭頂は黒色で、雌・幼鳥では淡い。生息域の水辺のヨシ原などの景観に類似した色彩であり、本種を生息域で確認することは簡単ではない。嘴と脚は、黄褐色味のある緑色。主に魚類を捕食し、そのほか両生類や昆虫、甲殻類を捕らえる。繁殖はヨシ原内で行い、主にヨシの茎や葉を用いて皿形の巣を作る。繁殖期にはブー、ブーウと低いがよく通る大声で繰り返し鳴く<sup>(6, 11, 23)</sup>。



提供：寺本 明広(2017.12.1撮影)

### 生息・生育状況

生息環境は広いヨシ原で、国内の繁殖地は北海道、茨城県、千葉県、滋賀県など局所的である。北海道では夏鳥とされ、本州以南では主に留鳥として生息する<sup>(1)</sup>。山口県の2015-2016年の越冬期における現地調査では2メッシュで確認されている。

### 選定理由

広いヨシ原で生活するため、生息の確認が困難であるが、全国的に生息数が少ないと考えられ、開発などの影響で生息が確認されなくなった地域もある<sup>(1)</sup>。山口県内でも記録が少なく局所的である。

### 減少等の要因

個体数の動態などの把握は困難であるが、河川改修や道路工事に伴うヨシ原の埋め立てにより生息地が減少しているため、生息数の減少が懸念される。

- 68 -

ツル目 ツル科 0201000100300 <b>マナヅル</b> <i>Grus vipio</i> Pallas, 1811	カテゴリ		
	山口県	2018	CR
		2002	CR
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：渡邊 徹】

全長1270mm。雌雄同色。成鳥は眼の周囲が赤く裸出し、その外側は黒い。頭頂から後頸、喉は白く、側頸前部から胸、腹、下尾筒までと背は灰黒色。足は淡紅色で虹彩は赤橙色。幼鳥は頭部や頸、背、翼に褐色の羽があり、顔の赤みはない<sup>(24)</sup>。広い農耕地で落穂や小魚、軟体動物などを食べる。



提供：渡邊 徹(2014.1.4撮影)

### 生息・生育状況

ロシアのアムール川流域や中国黒竜江省で繁殖し、日本には冬鳥として主に鹿児島県出水平野に飛来する<sup>(25)</sup>。山口県では春と秋の渡りの時期に飛来することがほとんどであるが、まれに越冬することもあり、山口湾周辺の干拓地、防府市西浦干拓地、山陽小野田市厚狭川河口などで記録がある<sup>(6)</sup>。

### 選定理由

全生息数が4000-5000羽とされる世界的な希少種であり、その半数が鹿児島県出水平野に集中して飛来する<sup>(24)</sup>。山口県では定期的な飛来はない。

### 減少等の要因

繁殖地が極東の限られた地域のみで、越冬に必要な広い農耕地も減少している。出水平野への一極集中は伝染病による大量死が懸念され越冬地の分散化が必要である。

- 69 -

ツル目 ツル科 0201000100400 <b>タンチョウ</b> <i>Grus japonensis</i> (Müller, 1776)	カテゴリ	
	山口県	2018 CR
		2002 EX
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

【執筆者：原田 量介】

体長約1400mm。大型のツル。体は白く、額、頭上、目先は皮膚が裸出し頭部は赤色。目先、額、頭上の前には黒色の剛毛が密生し、喉から首、後頸にかけて黒い。次列風切と三列風切は黒く、尾は白いが三列風切が長く、翼をたたんでいる時は尾を覆っているため尾が黒いように見える。声は大きくコロロン、クルルーンと鳴き響く<sup>(21)</sup>。北海道東部の湿原に約1500羽が生息<sup>(11)</sup>。まれに本州や九州に冬鳥として飛来するが大陸からの個体と思われる。鹿児島県出水市には、ナベヅル、マナヅルに混じって飛来することがある。幼鳥は頭部、頸部が茶褐色。



提供：原田 量介(2007.11.26撮影)

### 生息・生育状況

江戸時代の文献に周防や長門からの産物としての記録<sup>(26)</sup>があり、大正時代には熊毛町八代でナベヅルに混じり飛来した記録<sup>(22)</sup>があるが、以降、記録はなく絶滅とされていた。2007年11月に山口市名田島の田んぼに幼鳥1羽が飛来。この個体は人をあまり恐れず、翌年の1月まで越冬した唯一の記録となった。

### 選定理由

大正時代以降記録がなく、山口県では絶滅種としていた<sup>(6)</sup>が、2007年に山口市に幼鳥が飛来したため、絶滅危惧ⅠA類とした。

### 減少等の要因

農薬によるエサ生物の汚染、生息環境の減少、密猟による減少など。

ツル目 ツル科 0201000100600 <b>ナベヅル</b> <i>Grus monacha</i> Temminck, 1835	カテゴリ	
	山口県	2018 CR
		2002 CR
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長965mm。小型のツル。額は黒、それに続く頭頂までは暗紅色。頭から頸は白。胸から下の体は黒灰色で、三列風切は伸長してふさ状になり、尾を覆っている。翼は風切は黒、雨覆は黒灰色であるが濃淡の差はあまりない。嘴は黄緑色で、脚は黒色。若鳥は目のまわりは黒いが、額から頭部は淡いクリーム色で頸は白、体は成鳥より黒味が強い<sup>(19)</sup>。日本には10月末に渡来し3月末まで越冬する。穀物、植物の根、昆虫類、両生類等を採餌。東シベリア南部とロシア極東南部のアムール川、ウスリー川、レナ川流域で繁殖。地上営巣し2卵を産む<sup>(11)</sup>。



提供：木下 淳美(2017.10.25撮影)

### 生息・生育状況

かつて日本各地に冬鳥として渡来。明治時代以降は鹿児島県と山口県に限定される様になる<sup>(11)</sup>。山口県内でも往時は広く分布し越冬。定期的渡来地として特別天然記念物に指定されている周南市八代のナベヅル渡来地では江戸時代には飛来記録が無く明治期以降に飛来記録が現れる<sup>(26-31)</sup>。

### 選定理由

周南市八代は本州唯一の定期的渡来地として貴重。給餌、ねぐら整備、給餌場付近の電線地中化や出水の保護鳥の移送放鳥等、様々な飛来数回復の試みにも関わらず近年の越冬数は10羽程と僅か。

### 減少等の要因

ゴルフ場建設によるねぐらの減少、採食場所の水田が土地改良で乾田化。また越冬地で給餌が行われ、個体群維持に役立つが、一極集中により周南市八代ではその影響で渡来数が減少している<sup>(11)</sup>。



チドリ目 シギ科

0201400401200

## コシャクシギ

*Numenius minutus* Gould, 1841

カテゴリ

山口県	2018	CR
	2002	CR
環境省	2019	EN

### 形態・生態

全長310mm、全身バフ色で背は黒褐色。頭部は黒褐色の頭側線と過眼線が明瞭である。チュウシャクシギより小さく、嘴も短い。下に曲がった湾曲具合も本種の方が小さい<sup>(1)</sup>。春と秋の渡りの時期にまれな旅鳥として、海岸近くの農耕地、水田、草地、埋立地などで見られる。全国で記録はあるが観察例は少ない。干潟を利用するシギ類とは異なり、農耕地や草地を移動し、長時間滞在することが多くないため観察例が少ないものと思われる<sup>(1)</sup>。九州や対馬では比較的観察例が多い<sup>(23)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：豊田 敏則(2017.5.2撮影)

### 生息・生育状況

山口県内ではまれな旅鳥として、春と秋の渡りの時期に海岸近くの農耕地、水田、河口、島嶼部の水田、草地で見られる。萩市見島、下関市角島、下関市白崎・小月、厚狭川河口、防府市台道干拓などで記録がある。地上を歩きながら、昆虫類、アリ類、植物の種子などを食べる<sup>(1)</sup>。

### 選定理由

数少ない旅鳥として、まれに見ることができ。渡り途中の休息地、採食地の環境悪化や減少が危惧され、種の保存が懸念される種で、種の保存法に基づく国際希少野生動物種である。

### 減少等の要因

渡り途中の休息地および採食地である沿岸部周辺の農耕地、水田、草地等の減少や環境悪化により、渡り途中の休息やエネルギー補給に影響があると思われる。

- 72 -

チドリ目 シギ科

0201400402000

## カラフトアオアシシギ

*Tringa guttifer* (Nordmann, 1835)

カテゴリ

山口県	2018	CR
	2002	CR
環境省	2019	CR

### 形態・生態

全長300mm。雌雄同色。成鳥夏羽は頭部からの上面が黒褐色で、羽縁は白い。顔から胸は白地に黒褐色斑が点在し、腹からの体下面は白い。冬羽は頭部から後頸、側頭が灰白色で、細かい淡褐色の縦斑がある。背からの上面は灰色で、白い羽縁がある。喉からの体下面は白く、側胸は淡灰色。幼鳥は冬羽に似るが、上面は褐色みが強い。嘴はやや上に反り、似たアオアシシギと比べて基部が太くて黄緑色みがある。足はアオアシシギより短く、黄色みが強い<sup>(24)</sup>。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2011.9.13撮影)

### 生息・生育状況

繁殖地はサハリンのみ。数少ない旅鳥として日本各地の干潟、干拓地、水田などに飛来し、秋の記録が多い。越冬地は東南アジア<sup>(24)</sup>。山口県では田布施川、下関市木屋川河口、下関市小月、萩市見島、山口市きらら浜自然観察公園などで記録がある。

### 選定理由

繁殖地が限られ、個体数も少ない世界的な希少種である。山口県での記録も少ない。

### 減少等の要因

繁殖地が限られることと、中継地、越冬地の環境悪化による。

- 73 -

チドリ目 シギ科 0201400404100 <b>ヘラシギ</b> <i>Eurynorhynchus pygmeus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	CR
		2002	CR
	環境省	2019	CR

### 形態・生態

全長150mm。雌雄同色。名前の通り嘴の先がへら状になっている。成鳥夏羽は頭部から胸までが赤褐色で、頭頂は黒褐色の縦斑がある。胸からの体下面は白く、胸から脇にかけて黒褐色の縦斑がある。背からの上面の羽縁は赤褐色。嘴と足は黒い。冬羽は頭部からの上面が灰色で眉斑は白く、羽縁は白い。喉からの体下面も白い。幼鳥は顔、喉からの体下面が白く、頭頂は褐色で黒褐色の縦斑がある。背からの上面は黒褐色で羽縁は白い。トウネンとほぼ同大で、トウネンの群に混じることが多いが、頭部を左右に振りながら採餌するため区別しやすい<sup>(24)</sup>。

### 生息・生育状況

繁殖地はロシア北東端のチュコト半島周辺で、日本ではまれな旅鳥として干潟、水田などに飛来し、秋の記録がほとんど。越冬地は中国南西部、東南アジア、インド北東部<sup>(32)</sup>。山口県では瀬戸内の干潟や干拓地を中心に数ヶ所記録があるが、近年の飛来記録は萩市見島に一度あるのみ。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：藤原 正徳(2009.9.25撮影)

### 選定理由

全個体数が140-480羽と推定される、絶滅の危険が極めて高い種であり、人工飼育や人工孵化が行われている<sup>(32,33)</sup>。山口県への飛来もほとんどない。

### 減少等の要因

繁殖地に限られ、重要な中継地の黄海沿岸の開発、越冬地の東南アジアでの狩猟の影響が大きいとされる<sup>(32-34)</sup>。絶滅を防ぐには繁殖地、中継地、越冬地の全てが保全されることが必要。

- 74 -

チドリ目 ウミスズメ科 0201401000200 <b>ウミスズメ</b> <i>Synthliboramphus antiquus</i> (Gmelin, 1789)	カテゴリ		
	山口県	2018	CR
		2002	CR
	環境省	2019	CR

### 形態・生態

全長255mm。雌雄同色。嘴は短くて太く、黄白色。夏羽は頭、後頸、喉、胸側が黒色。眼の後方上に白線がある。体の上面は石板灰色で下面は白い<sup>(23)</sup>。冬羽では目の後ろから側頭部には白色線がなく、喉は灰色になる<sup>(1)</sup>。ユーラシア東部、千島列島、アリューシャン列島、北アメリカ北西部の沿岸で繁殖する<sup>(1)</sup>。日本での繁殖は北海道天売島で1956年500羽、1987年約200羽が繁殖していたと推定されるが、繁殖地の現状については不明な点が多い<sup>(1)</sup>。冬期は全国各地の海上に分布する<sup>(1)</sup>。

【執筆者：弘津 聖也】



提供：豊田 敏則(2016.1.20撮影)

### 生息・生育状況

萩市見島航路での観察例が多い。田万川名島沖、見島沖海上、豊北町角島などで記録されている。山口県では、日本海側の沿岸海域で主に見られる<sup>(6)</sup>。上関町沖の瀬戸内海でも確認された。

### 選定理由

山口県下の日本海や瀬戸内海の沖の海上で見られるが、観察記録数は少ない。

### 減少等の要因

ネズミヤカラス類による捕食、漁業による混獲などがある。1997年のナホトカ号油流出事故の漂着死体の内、1/3が本種であり油汚染の脅威は大きい<sup>(1)</sup>。

- 75 -

チドリ目 ウミスズメ科

0201401000300

## カンムリウミスズメ

*Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1836)

カテゴリ

山口県	2018	CR
	2002	CR
環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長240mm、夏羽では額から頭頂は黒色、長い冠羽があり、後頭部は白い。喉・顔・頸側・胸側は黒く、体の上面は青灰色、体の下面は白い。嘴は青灰色。冬羽は頭頂から上面が暗灰色でウミスズメに酷似するが眼の前後に白色部がある<sup>(11,23)</sup>。ウミスズメ類で唯一暖海域である黒潮及び対馬海流の流れる日本周辺の島で繁殖する<sup>(11)</sup>。繁殖地は北限は石川県七ツ島、南限は伊豆諸島鳥島、最大の宮崎県門前町枇榔島、他に福岡県沖の島小屋島が知られている<sup>(11)</sup>。繁殖後は北上して夏から秋を過ごした後、冬は繁殖地周辺以南にいると思われる<sup>(11)</sup>。



提供：弘津 聖也(2015.6.14撮影)

### 生息・生育状況

上関町八島・宇和島・祝島近海では2008年5月-2015年12月の調査で11月を除いて一年を通して確認でき、5月に幼綿羽に覆われた雛も6回確認できた<sup>(35)</sup>。萩市尾島・相島近海では数羽の群れが見られ、繁殖の可能性があると営巣の確認には至っていない<sup>(6)</sup>。

### 選定理由

山口県内の離島で繁殖の可能性もあるが、営巣の確認には至っていない。分布は局所的で推定個体数も極めて少なく、日本周辺に繁殖分布は限られ、国の天然記念物に指定されている<sup>(11)</sup>。

### 減少等の要因

油汚染などで一気に危機的状況が増大する可能性がある<sup>(11)</sup>。離島の崖穴や岩石の間や草の間などに営巣するため釣り人やネズミ類やカラスなどの影響、また刺し網での混獲が懸念される<sup>(11)</sup>。

- 76 -

ブッポウソウ目 ブッポウソウ科

0201800200100

## ブッポウソウ

*Eurystomus orientalis* (Linnaeus, 1766)

カテゴリ

山口県	2018	CR
	2002	CR
環境省	2019	EN

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長約300mm、翼長710mm。頭部全体は暗緑色、嘴と脚は赤色、胴体は青色や緑色を帯びた光沢がある。飛行時に初列風切の基部近くにある白い幅の広い帯が目立つ。東南アジアを中心にユーラシア大陸東部からオーストラリアにかけて分布。日本には夏鳥として飛来、繁殖したのちは9-10月頃に東南アジアの越冬地へと移動する。フライングキャッチという独特の採食方法でコガネムシなどの甲虫を捕らえる。またそうした甲虫の殻を砕く「碾き白」として貝殻や小石、プラスチック、アルミ片を集めて雌や雛へ与えることが知られている<sup>(36)</sup>。



提供：小林 忠治(2018.7.9撮影)

### 生息・生育状況

自然環境下では、杉やブナなどの大木の樹洞やキツツキの古巣で営巣するが、橋梁やダムへの排水口も利用することもある。本種が多く生息する中国地方では木製電柱に開けたキツツキの巣穴を利用していたが、現在では大半が巣箱で営巣している。近年山口県内でも巣箱による繁殖が確認されている。

### 選定理由

岩国市錦町深谷大橋での繁殖が途絶えてからは山口県内では繁殖はおろか飛来すらまれな状態であった。近年保護増殖のため電柱等に架設した巣箱が利用され始めたが、まだ数は少ない。

### 減少等の要因

橋の塗装作業などで営巣場所が失われたことも一因だが、木製電柱で営巣した記録も無く、もともと数は少なかったと推定される。巣穴を掘れない鳥であり巣箱による保護活動は今後も必要である。

- 77 -

キジ目 キジ科 0200100100200 <b>ヤマドリ</b> <i>Syrnaticus soemmerringii</i> (Temminck, 1830)	カテゴリ		
	山口県	2018	EN
		2002	EN
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長雄約250mm、雌約550mm。雄は体全体が赤銅色で金属光沢がある。背、翼、胸、腹には白色の羽縁があり、尾はキジよりも長く、黒やバフ色の横斑、ゴマ状の黒点が竹の節のようにある。雌はキジの雌に似るが、全体的に茶褐色。尾羽の先端は白い斑がある<sup>(37)</sup>。日本には5亜種が生息し、山口県には南西部に亜種ウスアカヤマドリ、東北部に亜種シコクヤマドリが生息するとされる<sup>(6)</sup>。山地の茂った林に棲み、木や草の実、昆虫類、冬期にはシダ類なども食べる。3月頃には繁殖期に入り、雄は縄張り内で羽ばたき、ドドドと音を出す誇示行動を始める。

### 生息・生育状況

日本特産種。亜種シコクヤマドリは、中国地方と四国地方に、亜種ウスアカヤマドリは房総半島、伊豆半島、紀伊半島、山口県の一部に生息するとされているが、各亜種の境界が不明瞭である<sup>(37)</sup>。森林に生息し、沢ぞいのスギ、ヒノキなどの人工林と広葉樹林が混在した環境を好むが、観察する機会は少ない。



提供：藤村 泰邦(2018. 6. 7撮影)

【執筆者：原田 量介】

### 選定理由

生息数の減少。山口県内での各種鳥類生息調査や観察会においても確認数が少なく、狩猟者の減少。有害鳥獣駆除に重点が置かれ狩猟されることが少ないにも関わらず個体数が少ない。

### 減少等の要因

広葉樹林の減少と人工林など森林の荒廃による生息環境の悪化。外敵となる獣類の増加による餌の競合、捕食圧の増加が考えられる。森林整備と広葉樹林の保護育成など。

- 78 -

チドリ目 セイタカシギ科 0201400300100 <b>セイタカシギ</b> <i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	EN
		2002	EN
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長370mm。頭部から腹部まで白色で、背、翼は黒色。個体によって頭部にも黒色があり、黒色の度合いは個体で異なる。嘴、脚、目は赤色。嘴は細長く、脚も長い。体型、羽色、嘴、脚の色で、他のシギと区別できる。主に海岸に近い水田、浅い池沼などに生息し、浅い水辺で昆虫の幼虫や甲殻類、小魚、オタマジャクシなどを捕らえて食べる<sup>(11, 23)</sup>。鳴き声はケツやピユウという声で、繁殖期にはケツケツケツ・・・と鳴きながら飛びまわる<sup>(38)</sup>。湿地周辺の地上で営巣し、枯れ草を積み重ねて皿型の巣を作る<sup>(39)</sup>。

### 生息・生育状況

日本では全国で記録があり、千葉県や東京都など、局所的に繁殖が確認されている地域がある<sup>(11)</sup>。山口県内の主な観察記録は春秋の渡りの時期だが、2012年に繁殖が初めて確認された<sup>(4)</sup>。2016年から2017年に実施された県内の調査では1メッシュで繁殖が確認されている。



提供：寺本 明広(2013. 4. 15撮影)

【執筆者：寺本 明広】

### 選定理由

全国的に確認記録は増加しており<sup>(11)</sup>、山口県内でも繁殖が確認されているが、湿地の埋め立てなどによる生息状況の悪化は常に懸念される。

### 減少等の要因

繁殖や渡来記録は増加傾向にあるものの、全国で水田や湿地は減少傾向にあり、生息環境を残していくことが望まれる。

- 79 -

タカ目 タカ科 0201500200600 <b>チュウヒ</b> <i>Circus spilonotus</i> Kaup, 1847	カテゴリ		
	山口県	2018	EN
		2002	VU
	環境省	2019	EN

### 形態・生態

全長雄約480mm、雌約580mm。雄の羽色は変化が多く灰褐色から茶褐色まで様々であるが、腰は白く、風切羽の先端が黒く、黄帯のある個体が多い。雌は頭部や胸が黄白色、体は褐色から茶褐色で、風切羽には黄帯がない。ヨシ原のある広い湿地や草地の上を低く飛び、鳥やネズミ、は虫類、両生類、魚類などを食する。翼を浅いV字型に広げ滑翔しながら、目と耳で獲物を探す<sup>(1)</sup>。主な繁殖地は北日本であるが、関東、中国地方、九州の一部でも1-2つがい繁殖している。越冬のため暖地へ移動し、ヨシやチガヤなどが混成する広い草地をねぐらとする。

【執筆者：原田 量介】



提供：原田 量介(2008.2.16撮影)

### 生息・生育状況

冬鳥として北日本や大陸から飛来する。河口周辺の比較的広いヨシ原や草地、農耕地を好む。瀬戸内海側に多く記録がある。日中はヨシ原や草地の上を飛び探餌するが、夕方はねぐらとする草地に集まり地上で休む<sup>(1)</sup>。1998年に宇部市の干拓地で繁殖が確認されたが<sup>(6)</sup>、開発のため数年で繁殖地は消失した。

### 選定理由

生息環境の悪化と消失により生息数の減少。繁殖個体数は全国で約100つがい<sup>(1)</sup>とされ、近年山口県内では繁殖はなく、可能性のある場所は2カ所のみである。国内希少野生動植物に指定されている。

### 減少等の要因

ヨシ原や草地の開発、主に太陽光発電所の建設により急速に減少している。広い農耕地に点在していた休耕地が、圃場整備により減少、二毛作による餌資源の減少。アマチュアカメラマンによる攪乱。

- 80 -

タカ目 タカ科 0201500201800 <b>クマタカ</b> <i>Nisaetus nipalensis</i> Hodgson, 1836	カテゴリ		
	山口県	2018	EN
		2002	EN
	環境省	2019	EN

### 形態・生態

全長雄約720mm、雌約800mm。大型の猛禽類。翼の幅が広く飛翔時先端が指状に開き、後縁部に膨らみがある。尾は長めで幅が広い。喉から胸に黒褐色の縦斑、翼と尾の下面には黄斑がある。顔は黒く後頭部には短い冠羽がある。背面は黒褐色。幼鳥は胸や腹部が白っぽく、背面は淡褐色。ピー又はキーと鳴き、繁殖期には雄雌の鳴き交わしがよく聞かれる。クマタカ属のうち最も北に分布。日本と朝鮮半島に留鳥として生息するが、朝鮮半島の生息数は少ない。小型から中型の鳥やほ乳類を捕食。九州以北の山地で繁殖。約20km<sup>2</sup>広い縄張り面積を持つ<sup>(1)</sup>。

【執筆者：原田 量介】



提供：藤村 泰邦(2017.1.23撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では300-1000mの山地で繁殖する。急斜面の太木に営巣し、隔年繁殖が多い。巣立ちする幼鳥は1羽が多く、親が次の繁殖を始めるまでは親の縄張り内で過ごすことが多い<sup>(1)</sup>。瀬戸内海側には少なく、日本海側に生息数が多い。近年、道路建設における環境調査により生息が確認されることが多くある。

### 選定理由

広い縄張りを必要とするため生息数は少ない。巣立ちする雛は1羽と少なく、繁殖は隔年で行うことが多く、繁殖成功率もよくない。

### 減少等の要因

道路建設やダム建設などによる生息環境の悪化、森林の伐採や荒廃による餌不足などが考えられる。開発行為に対しては、事前の生息調査を行い、生息が確認された場合には、十分な保全対策が必要。

- 81 -

スズメ目 ヤイロチョウ科 0202100100100 <b>ヤイロチョウ</b> <i>Pitta nympha</i> Temminck & Schlegel, 1850	カテゴリ		
	山口県	2018	EN
		2002	EN
	環境省	2019	EN

### 形態・生態

【執筆者：原田 量介】

全長約180mm。体色は頭上が茶色、背部は緑色、喉から胸と脇腹は黄白色、腹部中央から下尾筒にかけて赤色、腰と上尾筒はコバルト色、尾羽は黒く先がコバルト色、黄白色の眉斑、初列風切羽に白斑があり、八色鳥という和名で呼ばれる<sup>(6,11)</sup>。尾は短く、足は長めで、林床でミズズや昆虫類を採餌する。日本、朝鮮半島、中国、台湾にかけて繁殖し、中国南部からインドネシア、ボルネオ島にかけて越冬する。よく通る声でホーヘン、ホーヘンと続けて鳴く。照葉樹林の林に生息。林床が開けた腐葉土の多い場所を好み、急斜面の木の根元に営巣する。



提供：山口県長門土木建築事務所  
(2017. 6. 18撮影)

### 生息・生育状況

国内でも繁殖地が局限し、山口県内では春の渡り時期に秋吉台周辺や日本海側の豊かな森林で鳴き声が聞かれることがある。1973年に角島で標識調査中に1羽が捕獲された記録<sup>(22)</sup>と、秋芳町青影で窓ガラスに激突死した個体が確認されている。2017年長門市で繁殖が確認され山口県内での初記録となった。

### 選定理由

生息数の県内局限。全国的にも生息地が少なく、幻の鳥と言われてきた。生息には豊かな広葉樹林が必要で、繁殖できる環境は大変貴重である。

### 減少等の要因

越冬地とされる熱帯から温帯の森林伐採による生息環境の悪化。繁殖地でも広葉樹林の伐採、スギ等人工林の増加による影響で生息数が減少。近年、森林の成長と共に個体数が回復する可能性がある。

- 82 -

キジ目 キジ科 0200100100100 <b>ウズラ</b> <i>Coturnix japonica</i> Temminck & Schlegel, 1849	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	NT
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長200mm。丸い体つきで尾は短い。頭から体の上面は褐色で黒と淡黄色の横斑と縦斑がある。下面は淡黄褐色で、胸から脇には赤茶色と黒の縦斑がある。眉斑は黄白色である<sup>(23)</sup>。平地から山地の草原や農耕地に生息する。地上に営巣し、巣作りは雌が行い、8-13個の卵を産む。雌のみが抱卵する。餌は草の種子や昆虫類などである。グワックルルルなどと鳴く<sup>(41)</sup>。人や犬が近づくとその足下から飛び立ち、ブルルルという羽音を立てて直線的に低く飛び、滑翔して草の中に降りる<sup>(23)</sup>。



提供：藤原 正徳(2018. 4. 14撮影)

### 生息・生育状況

本州中部以北で繁殖する。山口県では冬鳥として飛来するが、夏期の記録もある<sup>(42)</sup>。平地から山地の草原や農耕地に生息する。山口県内では岩国市尾津や山口市阿知須町、萩市見島などの記録があるが、記録数はきわめて少ない。

### 選定理由

全国的に減少している。山口県においても、2000年以降の観察記録はほとんどない。2013年に「狩猟鳥獣」の指定が外れたが、その後も回復の兆しは見られない。

### 減少等の要因

草地開発、河川敷の樹林化やレクリエーション利用などにより生息数は減少している<sup>(11)</sup>。

- 83 -

カモ目 カモ科 0200200100100 <b>サカツラガン</b> <i>Anser cygnoides</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU
		2002 VU
	環境省	2019 DD

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長870mm<sup>(23)</sup>。大きくて嘴も頸も長い<sup>(23)</sup>。頭頂から後頸は黒褐色、頬から前頸は淡褐色で境界の濃淡ははっきりしている<sup>(23)</sup>。嘴は黒くて基部に白線があり、足はオレンジ色<sup>(23)</sup>。シナガチョウはサカツラガンを家禽化したものである<sup>(43,44)</sup>。北東アジア、サハリンで繁殖し、朝鮮半島、中国の揚子江流域で越冬する。推定個体数は3-5万羽、日本には冬鳥として北海道から南西諸島まで少数が渡来する<sup>(6)</sup>。



提供：藤原 正徳(1998.12.29撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬期に長門市油谷町油谷湾、長門市青海湖、下関市木屋川、山口市阿知須土路石川、防府市西浦干拓で1-2羽の観察記録がある<sup>(6,45,46)</sup>。冬は夜間ねぐらとなる安全な水域と、餌場となる広い水田のある地域に渡来する。マガン、ヒシクイ、コハクチョウと行動を共にした観察例もある<sup>(6)</sup>。

### 選定理由

まれな冬鳥として渡来する<sup>(6)</sup>。

### 減少等の要因

日本では減少したため1947年に狩猟鳥から除外されたが、以降は極めてまれな迷鳥である<sup>(11)</sup>。繁殖地域では狩猟圧と乾燥化による湖沼消滅などの影響を受け危機的な状況を迎えている<sup>(11)</sup>。

- 84 -

カモ目 カモ科 0200200100200 <b>ヒシクイ</b> <i>Anser fabalis</i> (Latham, 1787)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU
		2002 VU
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長780-1000mm<sup>(23)</sup>。マガンより大きく、顔や頸はマガンより暗色に見える<sup>(23)</sup>。体は黒褐色で淡色の羽縁がある<sup>(23)</sup>。上・下尾筒は白く、尾は黒く先は白い<sup>(23)</sup>。嘴は黒くて先端は橙色、足は橙色<sup>(23,43,44)</sup>。ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパや東アジアの温帯地域で越冬する。日本には亜種ヒシクイ(全長780-890mm)と、大型の亜種オオヒシクイ(全長900-1000mm)が渡来する<sup>(6,43,44)</sup>。北海道東部や東北北部を中継し、亜種オオヒシクイは主に日本海の沿岸湿地、亜種ヒシクイは主に宮城県の内陸湿地で越冬する<sup>(11)</sup>。



提供：藤原 正徳(2016.2.4撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬期に長門市青海湖、岩国市今津川、田布施町田布施川、山口市阿知須土路石川、山口市深溝・樫野川、防府市台道、下関市千鳥浜、宇部市常盤湖などで1-17羽が記録された<sup>(6,45,46)</sup>。冬期に夜間ねぐらとなる安全な水域と餌場となる広い水田のある地域に渡来する<sup>(6,45,46)</sup>。

### 選定理由

まれな冬鳥または旅鳥として渡来する<sup>(6)</sup>。種として国の天然記念物に指定されている<sup>(11)</sup>。また国内の主要生息地は鳥獣保護法、自然公園法、ラムサール条約湿地などで保護保全されている<sup>(11)</sup>。

### 減少等の要因

国内で生息地は20ヶ所以下に限られ、個体数は漸減傾向を示している<sup>(11)</sup>。その原因にねぐらの分散、気候変動による越冬地の北上、カムチャツカの繁殖地での禁漁区解除などが考えられる<sup>(11)</sup>。

- 85 -

カモ目 カモ科 0200200100500 <b>コクガン</b> <i>Branta bernicla</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU
		2002 VU
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長560-610mm<sup>(43,44)</sup>。小型のガンで頸は比較的短い<sup>(23)</sup>。体は黒色で、喉、脇、下腹、上尾筒、下尾筒は白い<sup>(23)</sup>。嘴と足は黒い<sup>(23)</sup>。幼鳥は体上面に淡色の縞模様があり、喉に白斑が無い個体もいる<sup>(6,23)</sup>。ユーラシア大陸、北アメリカ大陸の北極海沿岸のツンドラ地帯で集団営巣し、冬は太平洋や大西洋の温帯地域の沿岸で越冬する<sup>(6,11,23,43,44)</sup>。日本では秋期に最大8千羽もの群れが北海道東部の汽水湖に飛来し、主に北海道、東北地方へ移動し越冬する。越冬数は秋期の1/3で残りの越冬状況は不明である<sup>(1)</sup>。



提供：豊田 敏則(2015.4.5撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では長門市油谷町油谷湾、長門市青海島、三隅町沢江、萩市見島、田万川町江崎湾、山陽町埴生、宇部市西沖干拓、宇部空港・丸尾、山口市阿知須土路石川、防府市横曾根川、由宇町神代などで1-4羽の観察記録がある<sup>(6,45,46)</sup>。内湾や河口で水底の海藻類を逆立ちして食べる<sup>(6,45,46)</sup>。

### 選定理由

数少ない冬鳥として渡来する<sup>(6)</sup>。国指定の天然記念物である<sup>(1)</sup>。国内の生息地の多くはラムサール条約湿地、国指定鳥獣保護区、県設鳥獣保護区、県立自然公園に指定されている<sup>(1)</sup>。

### 減少等の要因

東日本大震災で三陸沿岸の養殖筏が流出・消滅し採食環境を失ったが、小群に分散し沈下した漁港に生え始めた海藻を利用した<sup>(1)</sup>。震災後個体数減少はないが、幼鳥数は2年目に半減した<sup>(1)</sup>。

- 86 -

カモ目 カモ科 0200200100600 <b>コハクチョウ</b> <i>Cygnus columbianus</i> (Ord, 1815)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU
		2002 VU
	環境省	2019 -

### 形態・生態

【執筆者：開作 秀敏】

全長1150-1500mm、翼開長1800-2250mm。オオハクチョウより小さく全身白色である。嘴の先端は黒く、基部は黄色。黄色部は黒色部より小さく、その先端はとがらず黒色部に食い込まない。足は黒い<sup>(6)</sup>。幼鳥は全身が灰褐色で、嘴の基部はピンク色である。冬鳥として主に北海道、本州で越冬するが、オオハクチョウより西日本にまで渡って来る傾向がある<sup>(6)</sup>。水田、湖沼、河口、内湾などに飛来し、落穂、二番穂、水草の葉、茎、根などの植物質を採食する。



提供：開作 秀敏(2012.2.14撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では、冬鳥として主に日本海側と瀬戸内側の河口、湖沼、内湾、水田などに渡来する。特に油谷湾周辺や山口湾周辺での記録が多い<sup>(46)</sup>。数羽から十数羽の群れで渡来することが多く、幼鳥が交ざる家族群も見られる。二番穂が伸び、水溜りが多い水田で採餌、休息することが多い。

### 選定理由

山口県内ではまれな冬鳥として各地に渡来している。過去に同一個体が複数年連続で渡来、越冬した記録があり<sup>(6)</sup>、越冬地として渡来する種として重要である。

### 減少等の要因

水田の宅地化、冬期の乾田化や畑化、早期の耕地などにより採食地や休息地が減少。ねぐらや採食地となる内湾、河口の開発による環境変化が考えられる。

- 87 -



カモ目 カモ科 0200200100800 <b>ツクシガモ</b> <i>Tadorna tadorna</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長625mmの大型のカモ類。成鳥は頭部から上頸、肩羽、胸から腹を通る縦線が緑色光沢のある黒色。体は白く、背から胸に栗色の広い帯がある。嘴は赤色、足は橙赤色。雄のほうが雌よりも全体的に色が濃く、雄夏羽個体には上嘴基部にこぶが現れる。幼鳥は全体的に色が鈍く、黒色の縦線や栗色の帯が不明瞭。消失することもある。顔には白色の羽毛が混じる<sup>(24,47)</sup>。主に干出した干潟を歩きながら、貝類や甲殻類などを食べる。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2011.2.3撮影)

### 生息・生育状況

ヨーロッパ中部～北部沿岸から中央アジアにかけて広く繁殖し、日本には冬鳥として主に九州北部の干潟に飛来する<sup>(24)</sup>。山口県では山口湾、山陽小野田市厚狭川河口、下関市木屋川河口など瀬戸内側を中心に飛来する。

### 選定理由

飛来の多くは九州北部に偏っており、山口県への飛来数も最大で数十羽程度と少ない。

### 減少等の要因

干潟の減少や環境悪化などで、好適な環境は確実に減っている。

カモ目 カモ科 0200200102000 <b>トモエガモ</b> <i>Anas formosa</i> Georgi, 1775	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長約400mm。小型のカモでコガモとほぼ同じ大きさ。雄の顔には黄白色と緑黒色の巴の模様があり、橙、黒、白色の筋が入った長い肩羽がある。胸は茶褐色で黒い斑点が無数にある。胸側に白い縦線があり、飛翔時に翼の後縁に白い線が出る。雌は保護色で、コガモの雌と似ているが、嘴の根元に小さな白斑がある。冬鳥として全国的に飛来するが、個体数が多いのは、日本海側と九州など数ヶ所である。東シベリア中部からカムチャツカにかけて繁殖し、中国南部から朝鮮半島南部、日本で越冬する<sup>(11,47)</sup>。年により渡来数が大きく異なる傾向がある。

【執筆者：原田 量介】



提供：原田 量介(2011.12.4撮影)

### 生息・生育状況

冬鳥として大きな河川の河口、湖沼に飛来するが、寒さが厳しくなってきたからの飛来が多い。近年は山間のダム湖でオシドリの群れに交じることが多く、宇部市小野湖では300-500羽の群れが確認されることもある。河口では海藻類、田んぼでは落ち穂などを食べているが、オシドリと同じくドングリも食べる。

### 選定理由

定期的な飛来地が少なく飛来後も長く留まることが少ない。年により増減が激しく生息が不安定。韓国での越冬数は多いが、大量死の記録もあり鳥コレラや鳥インフルエンザの驚異にさらされている。

### 減少等の要因

二毛作の奨励により、越冬期に餌場となる水田の減少。狩猟鳥のカモ類との識別が難しいため、飛来地における保護区の設定が必要。

ハト目 ハト科 0200400100200 <b>カラスバト</b> <i>Columba janthina</i> Temminck, 1830	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	NT

**形態・生態**

【執筆者：小林 繁樹】

全長約400mm。尾の長い大型のハト。全身黒色で頭部は紫赤色。体には緑色の金属光沢がある。嘴は暗青色で、先端は緑色。足は赤色。枝の上でウッー、ウッーと太い声で間をおいて鳴く。常緑広葉樹林で繁殖し、枝の茂みや樹洞に、小枝を粗く組み合わせて、外径240～350mmの皿形の巣をつくる。産卵期は2-9月で、5-6月が多い。1巣の卵数は1個。卵は白色無斑<sup>(19)</sup>。3亜種があり山口県を含む本州には基亜種カラスバトが生息し、小笠原群島・硫黄列島に亜種アカガシラカラスバト、先島諸島に亜種ヨナクニカラスバトが分布する<sup>(48)</sup>。



提供：小林 繁樹(2017. 5. 29撮影)

**生息・生育状況**

留鳥として本州中部以南の島嶼に分布、常緑広葉樹林等の密生した森に生息。離島以外ではまれ<sup>(20)</sup>。山口県内では萩市沖の島嶼、下関と光市、柳井市、上関町、周防大島町周辺の島嶼に生息地は限られ<sup>(45, 46)</sup>、留鳥性が高く現地調査で確認域が同一である事から生息が確認された島嶼では繁殖の可能性が高い。

**選定理由**

記録のある3地域は各々が隔離的である。更に絶滅した島嶼性の近縁種オガサワラカラスバトやリュウキュウカラスバトの様には島嶼環境変化や鳥インフル、ドブネズミ等の島嶼侵入で容易に減少する。

**減少等の要因**

山口県周辺の小島でのみ繁殖しており島嶼の環境変化の影響を受け易く、また地上営巣する事が知られており<sup>(49, 50)</sup>、捕食性哺乳類や虫類が島に侵入した場合には個体数の激減が予想される。

ミズナギドリ目 ミズナギドリ科 0200600100200 <b>オオミズナギドリ</b> <i>Calonectris leucomelas</i> (Temminck, 1836)	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	NT
	環境省	2019	-

**形態・生態**

【執筆者：弘津 聖也】

全長480mm、翼開長1200mm。頭から顔にかけて白地に黒褐色の斑点がある。背から翼上面は褐色で淡色の羽縁がある。体下面と下雨覆は白色で、風切羽と尾は褐色である。嘴と足は淡紅色<sup>(23)</sup>。翼が長くゆっくりしたはばたきに帆翔を交えて、水面低く弧を描き海上を飛翔する<sup>(6, 23, 43, 44)</sup>。イワシやイカの魚群に集まり海面や水中で捕食する<sup>(43, 44)</sup>。日本近海では3-11月に島嶼で集団繁殖する。親は11月初旬までに島を離れ、雛は11月下旬頃巣立ちする<sup>(43, 44)</sup>。冬は南下しマレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部沖までの熱帯海域にも分布する<sup>(43, 44)</sup>。



提供：弘津 聖也(2015. 8. 2撮影)

**生息・生育状況**

隣県の福岡県では繁殖が確認されていたが、山口県内でも萩市、上関町で集団繁殖地が確認された<sup>(6, 51)</sup>。地上に奥行き1m位の巣穴を掘って営巣するため、ネズミやイタチ、ネコなどの移入肉食哺乳類の捕食圧もある<sup>(43, 44)</sup>。そのためか、繁殖地はいずれも無人の離島である。

**選定理由**

山口県での繁殖は近年確認された2島に限られる<sup>(6, 51)</sup>。北海道渡島大島、岩手県三貫島、新潟県粟島、京都府冠島、島根県神島・沖島に生息する個体群が天然記念物に指定されている<sup>(43, 44)</sup>。

**減少等の要因**

地上の巣穴での営巣の為、イタチやネズミ類の捕食圧に弱く、繁殖は無人の離島でのみ確認されている。県内繁殖地での殺鼠剤による外来ネズミ類駆除は繁殖数増加に好影響したと考えられる<sup>(51)</sup>。

ペリカン目 サギ科 0200900200200 <b>ヨシゴイ</b> <i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin, 1789)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 NT
	環境省	2019 NT

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長360mm。日本のサギ類では最も小さい。体上面は褐色、下面は淡黄色。風切羽や初列雨覆は黒く飛翔時には目立つ。嘴は黄色で上嘴は黒い。雄は頭頂部に青みがあり首に1-2本の縦縞がある。雌は頭頂部の青みが小さく、首の縦縞は5本前後ある。ヨシ原のある湿地に生息するが<sup>(52)</sup>、見通しの良いところに姿を現すことはほとんどない<sup>(53)</sup>。早朝や夕方にヨシ原の縁に止まって獲物を待ち伏せし、小魚やカエルが近づくと頸部を伸ばして捕食する。危険を感じると、上を見上げて体を伸ばして静止するなどヨシにみせかける擬態を行う<sup>(52)</sup>。



提供：木下 淳美(2017.6.5撮影)

### 生息・生育状況

ユーラシア大陸東南部の温帯から熱帯にかけて繁殖する<sup>(54)</sup>。夏鳥として飛来するが、本州中部以南では越冬する個体も報告されている<sup>(55)</sup>。山口県内では瀬戸内海側の乃木浜野鳥公園、きらら浜自然観察公園、西沖干拓地で生息が確認されているが数は少なく、繁殖が確認されることも極めてまれである。

### 選定理由

生息環境の悪化が数の減少に拍車をかけていると思われる。生息の確認が難しいために、気がつかないうちに数を減らしてしまう可能性が高い。

### 減少等の要因

水田、湖沼などの湿地や、それに伴う大きなヨシ原が失われ、生息環境を奪われたことが原因。こうした環境変化は人間の生活とも密接に係わっているため、広い視野での環境保全対策が必要。

- 92 -

ペリカン目 サギ科 0200900200400 <b>ミゾゴイ</b> <i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck, 1836)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 NT
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長490mm。体の上面は赤褐色で、腹側はクリーム色に黒色の縦斑が入る。若鳥では、体の上面が暗褐色で、全体に黒い小斑が入る。他のサギ類と比較すると嘴が短い。平地から低山の広葉樹林および針広混交林に生息し、ミミズやサワガニ、陸産貝類、地上性昆虫などを主な餌としている<sup>(1)</sup>。繁殖期にはポオーツポオーツという声で夜に鳴く<sup>(23)</sup>。薄暗い林内で営巣し、樹上に枯れ枝やツタ状の細長い枝を使って、薄い皿型の巣をつくる<sup>(39)</sup>。



提供：寺本 明広(2017.6.5撮影)

### 生息・生育状況

本州、九州、四国、伊豆諸島など、基本的に日本の温帯域でのみ繁殖し、沖縄や台湾、中国南部、フィリピンなどで越冬する。2016年から2017年に山口県内で実施された繁殖期の調査では、5メッシュで繁殖の可能性ありの記録があった。

### 選定理由

山口県内での観察記録は少なく、国内各地でも記録が少なくなっていることから、全国的に個体数が減少していると考えられる<sup>(1)</sup>。

### 減少等の要因

ミゾゴイが営巣に利用する低山は、宅地化や道路建設などの開発の影響を受けやすい。また、越冬地の森林開発による生息地の減少が生息数に影響を与えている可能性がある。

- 93 -

ペリカン目 サギ科 0200900201200 <b>チュウサギ</b> <i>Egretta intermedia</i> (Wagler, 1829)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 VU
	環境省	2019 NT

**形態・生態**

【執筆者：寺本 明広】

全長685mm。コサギとダイサギの中間の大きさであるが、嘴の長さはコサギより短い。雌雄同色。全身白色で、繁殖期には胸と肩羽に飾り羽が生じる。繁殖期には黒色で目先は鮮黄色。非繁殖期の嘴は黄色。脚は黒色。水辺の草むらや水田で主に昆虫類を捕らえ、そのほか両生類、爬虫類、魚類なども食べる。水辺に近い林の樹上で繁殖し、通常他のサギ類と混じって集団で繁殖する。枯れ枝などを粗く組み合わせて、皿形の巣を作る<sup>(6, 11, 23, 39)</sup>。



提供：寺本 明広(2018. 8. 11撮影)

**生息・生育状況**

アジア、アフリカ、オーストラリアに分布。日本では主に本州以南に夏鳥として生息し、冬には南方に渡る。2016年から2017年に山口県内で実施された調査では7メッシュで繁殖が確認され、越冬する個体も少数確認されている。

**選定理由**

チュウサギの繁殖記録は全国的に減少しており<sup>(11)</sup>、繁殖期における山口県内の調査では1990年には13メッシュ、2000年には9メッシュと減少し<sup>(6)</sup>、最新の調査では7メッシュに減少している。

**減少等の要因**

草地や水田の減少による採食地の減少、農薬汚染による餌の減少に加えて、開発などによる営巣林の伐採が個体数の減少に影響していると考えられる。

ペリカン目 サギ科 0200900201400 <b>クロサギ</b> <i>Egretta sacra</i> (Gmelin, 1789)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 NT
	環境省	2019 -

**形態・生態**

【執筆者：開作 秀敏】

全長625mm、翼開長1010mm。コサギとほぼ同大で黒色型と白色型がある。黒色型の頭、頸、背面は石板黒色で、後頭の羽毛は少し長く、冠羽のようになる。胸から腹、下尾筒も石板黒色。嘴は黒褐色または黄褐色。足は黄褐色または緑褐色で、足指は黄色味が強い。白色型は全身白色で、嘴は黄色である。白色と黒色が交ざる中間型もある<sup>(6)</sup>。本州以南の岩の多い海岸に留鳥として生息するが、砂浜、干潟にも飛来する。九州以北には黒色型、奄美諸島以南では白色型と黒色型とがいる<sup>(23)</sup>。岸壁の棚や岩の隙間に枝や枯草を使って皿形の巣を作る<sup>(6)</sup>。



提供：開作 秀敏(2014. 9. 17撮影)

**生息・生育状況**

山口県内では日本海側、瀬戸内海側の海岸や島嶼部の岩礁の多い場所に生息する。越冬期では日本海側での記録が多い。繁殖は瀬戸内海側の光市や上関町などの島嶼で記録されている。単独での行動が多く、魚類、甲殻類、軟体動物などを捕食する。

**選定理由**

山口県内では島嶼部の岩礁の多い海岸で繁殖記録がある。生息も日本海側と瀬戸内海側東部の海岸や島嶼部に限られているため、釣り人や海洋レジャーによる繁殖環境への人的攪乱が懸念される。

**減少等の要因**

釣り人やレジャーを楽しむ人たちの繁殖地進入による人的攪乱が考えられる。また、海岸や砂浜などの開発による生息環境の減少も要因と考えられる。

ペリカン目 サギ科 0200900201500 <b>カラシラサギ</b> <i>Egretta eulophotes</i> (Swinhoe, 1860)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 VU
	環境省	2019 NT

**形態・生態**

【執筆者：弘津 聖也】

全長650-680mm、コサギくらいの大きさの白いサギ<sup>(6,11,23,43,44)</sup>。夏羽では後頭部に20本くらいの冠羽があり、嘴は橙黄色で足は黒くて足指は黄色である<sup>(23)</sup>。婚姻色では目先は青くなる<sup>(23)</sup>。冬羽では冠羽がなくなり、嘴は基部付近以外は黒く、目先は黄緑色、足は緑褐色になる<sup>(6,23)</sup>。ロシア沿海地方や朝鮮半島、中国東部で繁殖し、日本の沖縄地方からスマトラ、フィリピンにかけて越冬する<sup>(11)</sup>。日本では春秋の渡りの時期に全国の河口や干潟で記録があり、繁殖地に近い九州・沖縄地方での記録が多く、記録は増加中である<sup>(11)</sup>。



提供：弘津 聖也(2006.5.3撮影)

**生息・生育状況**

山口県内では下関市蓋井島、萩市見島、周南市四郎谷、岩国市門前川、山口市阿知須、山口市樵野川などに渡来記録がある<sup>(6,45,46)</sup>。主に春秋の渡り時期にまれに見られ、海岸、河口、干潟、水田、湿地、河川などの浅い水辺で動物質の餌を探す<sup>(6,45,46)</sup>。

**選定理由**

山口県内への渡来記録は少ない<sup>(6,11,45,46)</sup>。世界的に生息数が少なく、シラサギ類の中で最も絶滅が危惧される種である<sup>(6,11,45,46)</sup>。

**減少等の要因**

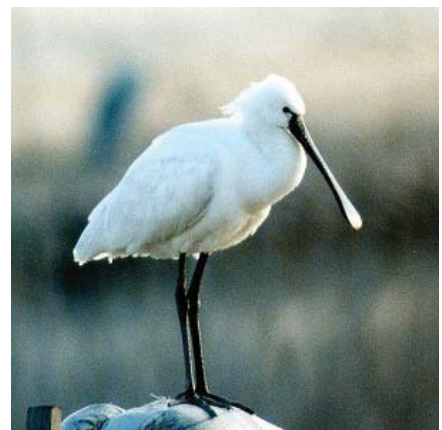
世界的に分布は局地的で繁殖地での総数は2600-3400羽とされ、開発による生息環境の喪失、水質汚染などにより、絶滅が危惧される<sup>(11)</sup>。

ペリカン目 トキ科 0200900300300 <b>ヘラサギ</b> <i>Platalea leucorodia</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 VU
	環境省	2019 DD

**形態・生態**

【執筆者：原田 量介】

全長約860mm。先が平たくしゃもじ状の黒くて長い嘴を持つ。嘴の先端部分は黄色。幼鳥は嘴が黄淡紅色。全身白色であるが、夏羽は後頭に伸びた冠羽が橙黄色、首の下部に橙黄色の帯が出るが、冬羽は冠羽が短くなり、橙黄色の色が消える。若鳥は翼の先端部分が黒い。嘴の基部から目にかけて黒く線状の皮膚が露出している。ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国などに3亜種が分布している<sup>(11)</sup>が、東アジアでの個体群は約10000羽とされている。韓国南部でも繁殖が確認されている。日本には、クロツラヘラサギに混じり少数が確認されることがある。



提供：原田 量介(2003.11.12撮影)

**生息・生育状況**

冬鳥として主に大きな河川の河口や水田などに飛来。1970年代には極めてまれな鳥であったが、近年は山口県内の一部、厚狭川や木屋川河口に1-数羽が定期的に飛来している。クロツラヘラサギに混じっていることが多く、干潮時には浅い水際で、水につけた嘴を左右に振りながら歩き、魚やエビ類を採餌する。

**選定理由**

飛来数が少なく、県内局限。

**減少等の要因**

生息地である干潟や浅い湖沼は開発により減少している。現在飛来している生息地の環境を保全する必要があり、鳥獣保護区に設定するなどの対策が必要。

ペリカン目 トキ科 0200900300400 <b>クロツラヘラサギ</b> <i>Platalea minor</i> Temminck & Schlegel, 1849	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	EN

### 形態・生態

全長740mm。顔は黒く、嘴は長いヘラ型で黒色。全身白色であるが、繁殖期には胸と後頭部に房状に換羽が伸び橙黄色になる。若鳥は嘴が翼の先が灰黒色で飛翔すると目立つ。低い小さな声でグググ、グエツと鳴く<sup>(20)</sup>。干潟や河口の濁った浅い水辺で、嘴をやや開き首を左右に振りながら餌を探し、嘴の間に入った餌を挟み取る。飛ぶときは浅く早い羽ばたきで、首と足を延ばして飛ぶ。韓国、北朝鮮、中国とロシア南部の島礁部で繁殖し、中国南部、香港、マカオ、台湾、ベトナム、日本などに渡り越冬する。日本の主な越冬地は九州、中国地方、沖縄。

【執筆者：原田 量介】



提供：原田 量介(2018.3.30撮影)

### 生息・生育状況

冬鳥として河口の干潟や広い池沼に飛来する。1980年代には不定期的に1-2羽が飛来するまれな冬鳥であったが、徐々に増え始め山口湾では2009年頃から10羽を越えるようになり、2017年には31羽が越冬した。瀬戸内海側の河口での飛来が多く、県西部の厚狭川河口、木屋川河口も定期的な飛来地となっている。

### 選定理由

東アジアに生息し、世界での生息数は最大で3941羽<sup>(56)</sup>。近年、山口県での越冬数も増加傾向にあるが、開発により生息地の減少が懸念される。生息地の環境保全が必要。

### 減少等の要因

近年、増加傾向にあるが繁殖年齢は3-4年を要し、2002年に台湾でボツリヌス中毒による大量死など、何らかの問題が起こると激減する危険がある。

- 98 -

チドリ目 チドリ科 0201400100800 <b>シロチドリ</b> <i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長170mm。雄の夏羽は頭頂が茶褐色、前頭と過眼線は黒い。後頭と体の上面は灰褐色である<sup>(23)</sup>。雄の冬羽と雌の頭頂は灰褐色、過眼線は褐色である。雄は頭と胸の脇に黒色部、雌には褐色部があるが、胸の両側でとどまり、胸の前方にまでは達しない<sup>(57)</sup>。餌は主に動物質で、昆虫類、クモ類、小貝類、ゴカイ、トビムシなどを食べる。

【執筆者：村本 和之】



提供：木下 淳美(2017.9.3撮影)

### 生息・生育状況

全国の海岸近くで繁殖し、秋冬は本州以南の砂浜や海岸の埋め立て地、干潟などに群れて生息する<sup>(23)</sup>。山口県では留鳥で、1年中観察される。山口市や山陽小野田市、長門市、周南市、柳井市、岩国市などでの繁殖記録がある。冬季間の生息分布もほぼ同様である。

### 選定理由

2000年以降の繁殖期に確認されたサブメッシュ数は17で、1999年以前の29に比べて減少している。

### 減少等の要因

営巣地である海岸や河口の砂礫地、砂洲、埋立地などの開発による消失や、裸地の植生の変化により、好適な営巣地が減少したことが原因と思われる。

- 99 -

チドリ目 シギ科

0201400401500

## ホウロクシギ

*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

カテゴリ

山口県	2018	VU
	2002	VU
環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長615mm。全身が薄いバフ色で、細かい黒褐色の縦斑がある。嘴は顕著に長く、下に曲がる。嘴は下嘴の基部側がピンク色で、そのほかは黒色。ダイシャクシギに似るが、ダイシャクシギには本種のような黄色みはなく、下腹部や腰が白色という点で区別できる。鳴き声はホーイーンとダイシャクシギに似た大きな声で鳴く。国内では主に渡りの時期に、広い干潟を好んで渡来する。長い嘴を地面に深く差し込み、ゴカイ類やカニ類を食べる<sup>(11, 23, 38)</sup>。

【執筆者：寺本 明広】



提供：寺本 明広(2016.9.18撮影)

### 生息・生育状況

繁殖地は東シベリア中部からモンゴル、ウスリー地方、満州、カムチャツカにかけてで、冬はオーストラリア、ニュージーランド、東南アジアなどに渡る。国内では琉球諸島で越冬する個体もいるが、主に春秋の渡りの時期に広い干潟などで確認される<sup>(11)</sup>。山口県では主に瀬戸内側の河口部で観察される。

### 選定理由

本種は観察数が少なく、生息数自体が少ないものと考えられる<sup>(11)</sup>。干潟や湿地が埋め立てなどにより減少し、生息数に影響を与えていると考えられる。

### 減少等の要因

干潟や沿岸部の湿地を利用しながら渡っていると考えられるが、全国的に利用できる環境は減少傾向にあり、エネルギーの補給に影響が出ていると考えられる。

- 100 -

チドリ目 シギ科

0201400401700

## アカアシシギ

*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)

カテゴリ

山口県	2018	VU
	2002	VU
環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長280mm。名前の由来通り足は赤い。夏羽は頭部から体上面が褐色で黒い縦斑がある。嘴はまっすぐで、基部が赤く<sup>(52)</sup>先端は黒い<sup>(53)</sup>。冬羽は頭部から体上面が一様に褐色になり、小さな白斑がある。次列風切と腰が白く、飛翔時に目立つ<sup>(52)</sup>。夏季にユーラシア大陸の温帯を中心に広く繁殖し<sup>(54)</sup>冬は中国南部、マレー半島、インドシナ半島に渡る<sup>(53)</sup>。日本には主に旅鳥として、春秋に河口の干潟や湿地に渡来するが、数は少ない。北海道で少数が繁殖する<sup>(53)</sup>。また沖縄本島は渡りの中継点や越冬地になっている<sup>(58)</sup>。

【執筆者：立野 昌宏】



提供：藤原 正徳(2010.4.16撮影)

### 生息・生育状況

旅鳥であり、山口県内での繁殖や越冬の記録はないが、春と秋の渡りの時期には瀬戸内海側の山口市阿知須や防府市西浦など複数の干拓地で、毎年少数が記録されている<sup>(6)</sup>。2016年には大阪南港野鳥園で越冬個体が確認されている。<sup>(59)</sup>

### 選定理由

渡りの中継点である沖縄本島では増加傾向にあるので<sup>(58)</sup>、全国的に数は増えているとみられているが、山口県内での観察記録は少数であり増えていない。

### 減少等の要因

もともと飛来数が少ない上にハス田、水田などの湿地や干潟が減少して生息環境が悪化したことがあげられる。その為、こうした環境の保全整備を行う必要があると思われる。

- 101 -

チドリ目 ツバメチドリ科  
0201400700100  
**ツバメチドリ**  
*Glareola maldivarum* Forster, 1795

カテゴリ		
山口県	2018	VU
	2002	VU
環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長230-260mm<sup>(43,44)</sup>。ツバメを大きくしたような形<sup>(23)</sup>。夏羽では頭から体の上面は暗灰褐色で上尾筒は白く、尾羽は黒い<sup>(23,43,44)</sup>。喉は黄灰色で黒い線で囲まれ、胸から脇が黄褐色で、腹と下尾筒は白い<sup>(23,43,44)</sup>。嘴は黒くて基部は赤い<sup>(23,43,44)</sup>。飛びながら昆虫などを食べる<sup>(6)</sup>。シベリア南部、中国、台湾、東南アジアなどで繁殖し広く分布する<sup>(6)</sup>。日本では旅鳥として渡来するが、局地的に繁殖も確認されている<sup>(6)</sup>。繁殖地には裸地的な環境を好み、4-5月に小群でコロニーをつくる<sup>(11,43,44,60)</sup>。



提供：弘津 聖也(2006.4.28撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では春秋に干拓地や農地で少数が確認される。山陽小野田市、山口市阿知須、萩市見島、岩国市尾津、防府市、周南市などで確認された<sup>(6,45,46)</sup>。日本では四国や九州以南など主に西日本で繁殖するが、茨木県、栃木県、埼玉県でも繁殖の記録がある<sup>(11)</sup>。春秋の渡りの時期には全国で記録がある<sup>(11)</sup>。

### 選定理由

山口県では旅鳥として飛来するが、繁殖地となるような広い埋立地がなく繁殖の記録はない<sup>(6,45,46)</sup>。国内の個体数については不明である<sup>(11)</sup>。

### 減少等の要因

被植率の低い環境で営巣するが、自然環境では減少傾向で、人工的な造成地は開発で消滅するため、安定しない<sup>(11)</sup>。また渡りの際に利用される荒れ地状の草原や耕作地も減少傾向にある<sup>(11)</sup>。

- 102 -

チドリ目 カモメ科  
0201400800400  
**ズグロカモメ**  
*Larus saundersi* (Swinhoe, 1871)

カテゴリ		
山口県	2018	VU
	2002	VU
環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：原田 量介】

全長約320mm。中国東北部から朝鮮半島の黄海沿岸部の一部で局所的に繁殖する。冬は韓国、日本、中国南部で越冬する<sup>(11)</sup>。冬鳥として関東以西の干潟や河口に飛来するが、九州北部に多い。干潟で主にカニ類を捕食する。潮が引いた干潟や浅い水辺を飛びながらカニを探し、ダイビングして嘴で捕え丸のみする。冬羽は頭部から腹部が白く、背部は淡青灰色。初列風切の先端は黒く、先に白斑がある。夏羽は頭部が黒く、目の上下後ろ側に白い縁がある。雌雄同色。嘴は黒色で、足は暗赤色。飛びながら探餌するときもキュツ、ギョツとよく鳴く。



提供：原田 量介(2016.2.16撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では瀬戸内海側の河口や干潟に多く飛来する。1980年代にはまれな冬鳥であったが、その後、飛来数は増加傾向にあり、山口湾、厚狭川河口、木屋川河口など県西部に多い。きらら浜自然観察公園では、韓国インチョンの繁殖地で装着されたフラッグ付きの個体が2例確認されている。

### 選定理由

東アジアに生息し、世界での生息数は7100-9600羽<sup>(11)</sup>。近年、山口県での越冬数も増加傾向にあるが、開発により生息地の減少が懸念される。生息地の環境保全が必要。

### 減少等の要因

河川の水質汚染が改善され、河口干潟に生息するカニ類などの餌が増加していることが考えられるが、他の越冬地の環境悪化が影響している可能性もある。生息環境の保全が必要。

- 103 -



チドリ目 カモメ科 0201400801300 <b>コアジサシ</b> <i>Sterna albifrons</i> Pallas, 1764	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：渡邊 徹】

全長260mm。雌雄同色。尾は凹尾で、深い切れ込みがある燕尾。成鳥夏羽は頭頂から後頭が過眼線とつながり黒い。額から眼の上と喉から側頸、胸、体下面にかけては白い。背と翼上面は灰色で、腰から尾は白い。嘴は黄色で先端が黒い。脚は橙色。冬羽は額の白色部が大きく、眼先も嘴基部付近は白い。嘴は黒色で、足は黒赤色。幼鳥は頭部が冬羽に似るが、褐色みを帯び、背や翼にはV字型や小さい褐色斑があり、鱗模様をしている。嘴は橙色みを帯びる<sup>(24)</sup>。



提供：渡邊 徹(2013.5.26撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥として本州以南に飛来して繁殖し、繁殖地周辺の海岸、河口、河川などに生息する<sup>(24)</sup>。小石の多い河原のような地面に営巣するが、近年では造成地に営巣することが多い。山口県での繁殖は古い記録が多いが、直近では下関市と周南市の2ヶ所で繁殖が確認されている。

### 選定理由

全国的に繁殖に適した小石の多い環境が少なくなっている。山口県でも近年の繁殖例は少なく、その他の地域でも飛来数が少ない。

### 減少等の要因

近年多い造成地での繁殖は、工事による攪乱やカラスなどによる食害、逆に放置されて草が伸びることによって、繁殖に適さなくなる例が多い。越冬地の環境悪化や狩猟の影響も懸念される<sup>(61-63)</sup>。

- 104 -

タカ目 タカ科 0201500200100 <b>ハチクマ</b> <i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck, 1821)	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	NT
	環境省	2019	NT

### 形態・生態

【執筆者：原田 量介】

全長雄約570mm、雌610mm。夏鳥として全国的に飛来し、平地から山地の森林で繁殖する。上面は黒褐色の個体が多いが、下面は赤褐色から黄白色、褐色など様々なタイプがいる。喉には黒斑、胸には細い縦斑がある。雄成鳥には風切羽先端に太い黒色帯と尾には2本の太い黒帯がある。雌は尾に細い黒帯が2-3本ある<sup>(20)</sup>。昆虫類、爬虫類、両生類、鳥類などを捕食するが、特にハチ類を好み、クロスズメバチの巣を掘り出し幼虫を捕食する。秋には東南アジア方面に渡り越冬するため、春と秋に集団で渡りをする様子が観察される。



提供：藤村 泰邦(2018.9.17撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥として飛来するが、山口県内での繁殖確認は1例のみ<sup>(64)</sup>。多くが渡り時期に移動する個体が観察され、特に秋には1000羽以上の移動個体が観察されることもある。近年、道路建設におけるアセスメント調査により、繁殖期における観察例も増えているため、十分な調査を行えば新たに見つかる可能性もある。

### 選定理由

山口県内での繁殖確認は1例のみで貴重。生態系の頂点に位置する猛禽類。繁殖には豊かな森林が必要。

### 減少等の要因

人工林の増加に伴う餌資源の減少が考えられる。スギ、ヒノキの人工林伐採後は、広葉樹などの雑木林に切り換えるなど樹種転換が必要。

- 105 -

タカ目 タカ科 0201500201200 <b>オオタカ</b> <i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 VU
	環境省	2019 NT

### 形態・生態

全長雄約500mm、雌約585mm。留鳥として全国の平地から山地に生息。南西諸島では冬鳥。九州、四国、西日本では繁殖数は少なく、北日本では多い。近年、市街地の公園や社寺林などで繁殖する例が増え<sup>(56)</sup>、個体数が増加傾向にある。ハシボソガラスと同大であるが、翼は短めで先端は丸みがある。上面は青灰黒色で下面は白く、細い灰黒色の黄斑が胸から腹部、翼の下面に密にある。雌もほぼ同色であるが、やや褐色味がある。幼鳥は全身褐色で上面は黒褐色の斑、下面は黒褐色の縦斑がある。主に中型の鳥類からウサギなどの哺乳類も捕食する<sup>(6,11)</sup>。

### 生息・生育状況

山口県内には留鳥として生息するが、生息数は少ない。冬期には分散、移動してきた幼鳥が観察されることが多い。繁殖の確認は現在まで4、5例しかない。キジやカモ類など中型の鳥からヒヨドリなどの小型の鳥も捕食する。秋から冬にかけては水鳥が集まる周辺でよく出現する。鳩舎のハトを狙うこともある。

【執筆者：原田 量介】



提供：原田 量介(2008.7.22撮影)

### 選定理由

生態系の頂点に位置する猛禽類。山口県内での繁殖数が極めて少ない。

### 減少等の要因

1970年代から松食い虫被害が拡大し、営巣木となるアカマツの枯死と、松食い虫防除のための有機リン系農薬の空中散布の影響も考えられる。道路建設などの開発も影響している。

- 106 -

タカ目 タカ科 0201500201300 <b>サシバ</b> <i>Butastur indicus</i> (Gmelin, 1788)	カテゴリ	
	山口県	2018 VU 2002 VU
	環境省	2019 VU

### 形態・生態

全長約490mm。ハシボソガラス大の中型の猛禽類。背、翼の上面は褐色、頬は灰色で白い眉斑がある。喉は白く中央に黒い縦線があり、下面は白く胸と腹には褐色黄斑がある。尾には褐色の黄斑が数本ある。日本、朝鮮半島、中国東部などで繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する<sup>(6,11)</sup>。繁殖期にはピクシーとよく鳴く。低山や丘陵の林で繁殖し、秋の渡り時期には群れで移動するため、太平洋側の岬では渡りが観察できる。里山のタカともいわれ、水田や森林が混在する谷津田環境を好み、ヘビやカエルなどを捕食することが多い<sup>(11)</sup>。

### 生息・生育状況

山口県内には4月上旬頃に、雄が早く飛来して縄張りを確保し、雌が飛来すると鳴きながらディスプレイフライトを行い、4月下旬には営巣を始める。アカマツの大木に営巣することが多いが、スギやコナラなどにも営巣する例が増えている<sup>(11)</sup>。7月上旬に雛が巣立ちすると、8月下旬頃から親鳥は渡りを始める。

【執筆者：原田 量介】



提供：藤原 正徳(2010.4.9撮影)

### 選定理由

生態系の頂点に位置する猛禽類。個体数が減少している。

### 減少等の要因

里山に耕作放棄地が増え、谷津田環境が減少、生息環境が悪化、減少していることによる餌資源の不足。現在生息が確認されている地域の環境保全と谷津田の環境回復が望まれる。

- 107 -

ブッポウソウ目 カワセミ科 0201800100100 <b>アカショウビン</b> <i>Halcyon coromanda</i> (Latham, 1790)	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	VU
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長270mmで、体の大部分は褐色をおびた赤色で雌雄同色である。頭部から背、肩羽は紫色の光沢があり、腰には青色の光沢のある羽がある。嘴は赤色でよく目立つ。サワガニ、カエル、カタツムリ、大型昆虫などを補食する<sup>(41)</sup>。キョロキョロと遠くまで聞こえる声で鳴くことから、声で気付くことが多い。明け方にさえずることが多く、雨の日には日中でもさえずることがある。繁殖は樹洞や朽木などである。山口県では4月下旬から7月下旬までの観察記録があり、5月中旬から7月中旬の記録が多い<sup>(65)</sup>。



提供：豊田 敏則(2004.7.3撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥で低地から山地の良く茂った落葉広葉樹林内の溪流沿いの林に生息する<sup>(66)</sup>。山口県内の生息記録は、岩国市、周南市、山口市、美祢市などの山間が中心であるが、個体数は少ない。山口県内での繁殖記録は1998年美和町の1例のみで、その後の確実な記録はないが、少数が繁殖しているものと思われる。

### 選定理由

減少傾向は見られないが、生息地が限られており繁殖個体数は極めて少ない。

### 減少等の要因

溪流近くで繁殖することが多く、林道設置による溪流の破壊や森林破壊の影響を受けるとされる。

- 108 -

ブッポウソウ目 カワセミ科 0201800100400 <b>ヤマセミ</b> <i>Megaceryle lugubris</i> (Temminck, 1834)	カテゴリ		
	山口県	2018	VU
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長375mm。日本産カワセミ科の中ではいちばん大きくて冠羽が目立つ。頭頂、頭側、後頭は白と黒のまだら、背、肩羽、腰、尾も細かい白黒のまだら模様。喉、頸側、後頸、胸、腹は白く、雄では胸に黄褐色と黒の斑紋、雌では黒の斑紋があり脇には黒い斑紋がある。翼の上面と下面の風切は白黒のまだらで、下雨覆は雄では白く、雌では黄褐色。嘴は黒くて先端はわずかに黄色。足は黒い。川沿いまたは水から少し離れた土の壁に自分で穴を掘って中に産卵する。巣穴の入り口は、直径83-150mm。1巣卵数4-7個。卵は純白無斑<sup>(19)</sup>。



提供：木下 淳美(2018.3.18撮影)

### 生息・生育状況

留鳥または漂鳥として九州以北に分布し、山地の谷や溪流、湖沼に生息する<sup>(20)</sup>。山口県内では内陸部の河川沿いから上流部、溪流にかけて生息するが、山口県西部の分布はまれで、隔離的である。また島嶼部での記録はない<sup>(45,46)</sup>。2016-2017年の最新の繁殖期調査ではこの地域からの確認記録がない。

### 選定理由

1990年代に記録のあった下関市豊北町・菊川町等の山口県西部の隔離個体群が最新の調査では消失している。河川改修や開発によって営巣に適した土の崖が減少し、営巣環境が悪化している。

### 減少等の要因

営巣場所が土の壁などであり生息・繁殖環境の減少が考えられる。生物ピラミッドの高位に位置し、農薬などに汚染された食物の摂取で、生物濃縮による生体や卵、雛への影響が懸念される。

- 109 -

ハヤブサ目 ハヤブサ科

0202000100500

## ハヤブサ

*Falco peregrinus* Tunstall, 1771

### カテゴリ

山口県	2018	VU
	2002	VU
環境省	2019	VU

### 形態・生態

全長雄420mm、雌490mm、翼開長840-1200mm、頭部から後頸は黒味が強く、背、肩羽、雨覆、尾は青灰色。下面は白く、上胸に細く黒い縦斑があり、腹、脇には黒い横斑がある。頬には目から下に黒いひげ状の黒斑が目立つ<sup>6)</sup>。主に海岸の断崖で留鳥として生息、繁殖するが、山地の岩場や市街地の建物での繁殖例もある<sup>23)</sup>。高い崖の上を狩りの見張り場として利用し、飛んでいる鳥を急降下して足で蹴って捕食する。工場の煙突や鉄塔などの人工物を見張り場として利用する場合もある。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：開作 秀敏(2014.3.11撮影)

### 生息・生育状況

渡り鳥が多く通過する、日本海側や瀬戸内海側の海岸付近での生息や繁殖例が多い。非繁殖期には農耕地や市街地にも移動する<sup>6)</sup>。繁殖期は3月から5月末で、毎年繁殖する例が多い。1腹卵数は3-4個であるが、最後にふ化した雛は遅れて生まれるため発育が悪く死亡することが多い。

### 選定理由

生息数が少数であり、繁殖適地が限定されるため繁殖数の増加が期待できない。鳥類において生態系の頂点であり、環境指標種として重要である。

### 減少等の要因

開発による生息地と繁殖地の環境悪化と減少。レジャー活動による人的攪乱が考えられる。また、農薬等に汚染された鳥類の捕食による生体への影響が懸念される。

- 110 -

カモ目 カモ科

0200200100300

## マガン

*Anser albifrons* (Scopoli, 1769)

### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	NT

### 形態・生態

全長650-860mm、翼開長1350-1650mm。全身灰褐色で背には淡い横斑があり、腹には黒い横縞がある。下尾筒、上尾筒は白<sup>6)</sup>。嘴は桃橙色で基部の周辺は白い。足はオレンジ色。幼鳥は嘴の付け根の白色部と腹部の黒い横縞はない<sup>23)</sup>。冬鳥として主に宮城、新潟、石川、福井、滋賀、鳥取、島根などで越冬。北海道、青森、秋田、山形などを中継地とする<sup>11)</sup>。ねぐらとなる安全な水域と餌場となる広い水田がある地域に渡来し、地上を歩きながら、落穂や二番穂などの穀類、水面を泳ぎながら水草などを採食する<sup>6)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：開作 秀敏(2011.1.7撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では、数少ない冬鳥として渡来し、日本海側の油谷湾、阿武川、瀬戸内海側の木屋川、厚狭川、榎野川、土路石川、秋穂二島、防府市台道、田布施川などで記録がある。1-数羽の渡来が多いが、幼鳥を含む数十羽の群れで渡来した記録もあり、2011年1月には、油谷湾で40羽の群れが渡来している。

### 選定理由

数少ない冬鳥として渡来する。幼鳥を含む家族群の渡来もあり、越冬地として渡来する種として重要である。国の天然記念物にも指定されている。

### 減少等の要因

ねぐら、採食地となる水田の乾田化、湖沼や湿地の埋立、放棄水田の草地化及び内湾や河口の開発により、生息環境の減少や悪化が考えられる。

- 111 -

カモ目 カモ科 0200200100700 <b>オオハクチョウ</b> <i>Cygnus cygnus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：開作 秀敏】

全長1400-1650mm、翼開長2180-2430mm。コハクチョウより大きく全身白色である。嘴の先端は黒く、基部は黄色。黄色部は黒色部より大きく、その先端は三角形にとがって黒色部に食い込む。足は黒い<sup>6</sup>。幼鳥は全身が灰褐色で嘴の基部はピンク色である。冬鳥として主に北日本の湖沼、内湾、河口、水田などに飛来し、水草の葉や根、海藻、落穂や二番穂のほか、春先は水田の若葉も好んで採食する。



提供：開作 秀敏(2015. 2. 19撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では、まれな冬鳥として渡来し、油谷湾、山口湾、青海湖、木屋川、厚東川、榎野川、佐波川等で記録がある。1羽での観察例が多いが、まれに数羽の家族群も観察されている。長門市油谷湾では2014年に渡来した幼鳥が2017年までの3シーズン連続して渡来、越冬した記録がある<sup>67</sup>。

### 選定理由

極まれな冬鳥として渡来する。幼鳥や家族群の渡来、同一個体の複数年連続での渡来、越冬した記録があり、越冬地として渡来する種として重要である。

### 減少等の要因

水田の宅地化、冬期の乾田化や畑化、早期の耕地などによる採食地や休息地の減少。ねぐら、採食地となる内湾、河口の開発に伴う環境変化が考えられる。

- 112 -

カモ目 カモ科 0200200101000 <b>オシドリ</b> <i>Aix galericulata</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	DD

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長450mm。雄は青色、紫色、橙色、赤色など多様な配色で嘴は赤色。顔周りや翼にかけて飾り羽が目立つ。特に翼にある三角形の飾り羽は銀杏羽とよばれ、オシドリの特徴のひとつとなっている。雌は全身灰色がかかった褐色で嘴は黒色に近く、地味な色合いであるが、白いアイリングは後方に過眼線となって伸び、胸から脇にかけては玉模様の白斑があるため、雌雄ともに識別は容易である。なお、雄のエクリプスは雌と同じ羽色であるが、雄は嘴が赤いことで区別できる。平地から山地にかけての水辺で、樹洞を使って繁殖する<sup>11</sup>。



提供：小林 繁樹(2018. 1. 18撮影)

### 生息・生育状況

ロシア極東南部から中国、日本にかけて分布し、河川や湖、池沼の樹木が水辺に覆い被さっているような暗い場所を好んで生息する<sup>11</sup>。山口県では越冬期の記録が主だが、2016年から2017年に実施された調査では2メッシュで繁殖確認がある。

### 選定理由

山口県では越冬期の記録が主で、繁殖する個体も少数確認されているが、生息環境は河川改修や道路工事などの影響を受けやすく、生息数に影響を与えるおそれがある。

### 減少等の要因

生息環境となる樹木に囲まれた河川や湖は開発などの影響を受けやすい。また、河川やダム湖を利用したレジャーによる影響も、警戒心の強い本種にとっては生息を脅かす要因と考えられる。

- 113 -

カモ目 カモ科 0200200101200 <b>ヨシガモ</b> <i>Anas falcata</i> Georgi, 1775	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長480mmの中型のカモ。雄の冬羽は、後頭に冠羽がありナポレオンの帽子のような形になる<sup>(23)</sup>。頭部は紅紫色と緑色の光沢のある黒で、喉は白く黒い横線がある<sup>(23)</sup>。体は灰色、三列風切は長く鎌状に垂れる<sup>(23)</sup>。嘴は黒で、足は灰褐色である<sup>(23)</sup>。雌は全身が褐色で、黒褐色の斑がある<sup>(23)</sup>。北海道で少数繁殖する以外は大部分は冬鳥として渡来し、内陸の河川よりも河口部や遠浅の湾内を好み、盛んに海藻をついばみ採餌する事が多い<sup>(6, 23, 43, 44)</sup>。

【執筆者：弘津 聖也】



提供：弘津 聖也(2005.2.11撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬鳥として渡来し、主な渡来地は河口部や海岸の数ヶ所で、群れが集中している<sup>(6)</sup>。油谷湾、佐波川河口、柳井市伊保庄海岸、樺野川河口、土路石川河口に比較的個体数が多い<sup>(6, 45, 46)</sup>。

### 選定理由

少しずつ減少傾向にあり、群れが山口県内の数ヶ所に集中する傾向がある<sup>(6, 45, 46)</sup>。

### 減少等の要因

山口県内では越冬する群れが集中する河口部・海岸などの環境が重要と考えられる。

- 114 -

カモ目 カモ科 0200200103400 <b>カワアイサ</b> <i>Mergus merganser</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長650mm。アイサ類の特徴である細長く先端がかぎ状に曲がった嘴は赤く、先端が黒い。雄成鳥は頭部が緑色光沢のある黒色で、冠羽はなく後頭が膨らんで見える。頸から脇と、胸からの体下面は白い。背は黒く、腰から上尾筒は灰色。雌の頭部は茶褐色で、短い冠羽がある。胸は白く、背から尾と下頸から脇は灰色<sup>(24)</sup>。潜水して魚を捕食する。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2010.2.22撮影)

### 生息・生育状況

ヨーロッパからロシアにかけて広く繁殖する。日本では北海道東部・北部では少数が繁殖する留鳥だが、多くは冬鳥として九州北部に飛来し、湖沼、河川、海岸などに生息する<sup>(24)</sup>。山口県では大きな河川の中～下流域に生息することが多い。

### 選定理由

山口県では各地に飛来記録はあるが、まとまった数が飛来するのは防府市佐波川流域のみで、他の地域では飛来数が少ない。

### 減少等の要因

減少の要因は特に見当たらず、元々山口県への飛来は少ない。

- 115 -

カイツブリ目 カイツブリ科

0200300100100

カイツブリ

*Tachybaptus ruficollis* (Pallas, 1764)

カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

形態・生態

全長260mm。雌雄同色。尾羽が短くてほとんどなく、丸っこい体つきをしている。虹彩は黄白色。成鳥夏羽では顔前面から頭頂、後頸にかけて黒く、頬と前頸は赤褐色。背や肩羽、腰は黒く、胸から下尾筒は淡褐色。嘴は黒く、基部に黄白色の部分がある。冬羽は夏羽に比べると淡色になり、上面は褐色みが強くなる。幼鳥は冬羽に似るが、嘴は黄色みを帯びる<sup>(24)</sup>。潜水が巧みで、小魚や甲殻類、水生昆虫などを捕食する。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2015.3.22撮影)

生息・生育状況

本州中部以南に留鳥として分布し、湖沼や池、流れの緩やかな河川に、水草を積み上げた浮き巣を作って繁殖する<sup>(24)</sup>。越冬期には幼鳥は群を形成する傾向があり、多い時には数十羽にもなることがある。

選定理由

山口県での繁殖は南部に偏っており、中部・北部では少ない。

減少等の要因

繁殖に適した池などが減少したことが個体数の減少につながったが、今回のレッドリスト作成の調査では、前回と比べて総記録数、繁殖確認数とも明らかに増加している<sup>(6)</sup>。

- 116 -

カツオドリ目 ウ科

0200800300100

ヒメウ

*Phalacrocorax pelagicus* Pallas, 1811

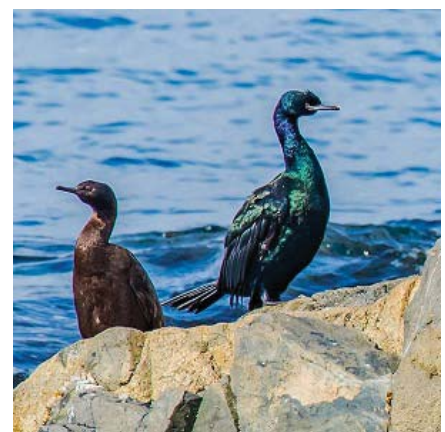
カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	EN

形態・生態

全長630-760mm<sup>(11)</sup>。ウ科の中では最も小さい<sup>(6)</sup>。全身は黒く紫色や緑色の光沢がある<sup>(23)</sup>。繁殖期には嘴の付け根の裸出部が赤褐色になり、頭頂と後頭には束状の冠羽、脚の付け根に大きな白斑が生じる<sup>(43,44)</sup>。日本北部の海岸の崖地に営巣<sup>(6)</sup>。集団で毎年同じ岩棚で営巣する<sup>(6,43,44)</sup>。枯れ草などで巣をつくり5-7月頃2-6個の淡青色の卵を産卵する<sup>(6,43,44)</sup>。

【執筆者：弘津 聖也】



提供：藤原 正徳(2016.3.12撮影)

生息・生育状況

冬期、山口県内では主に日本海側の岩礁海岸を生息する<sup>(6,45,46)</sup>。豊北町壁島ではウミウの群れの中に数羽の群れを見ることがある<sup>(6,45,46)</sup>。須佐町、阿武町、豊北町壁島・角島・長門二見沖、防府市野島沖、上関町長島四代で少数が確認された<sup>(6,45,46)</sup>。

選定理由

北太平洋沿岸に広く分布するが、山口県内ではウミウに比べても少ない<sup>(6,45,46)</sup>。豊北町壁島はウ科の渡来地として天然記念物に指定されている<sup>(6,45,46)</sup>。

減少等の要因

生息数減少の原因は明らかでない<sup>(11)</sup>。

- 117 -

ペリカン目 サギ科 0200900200300 <b>オオヨシゴイ</b> <i>Ixobrychus eurhythmus</i> (Swinhoe, 1873)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	CR

### 形態・生態

全長400mmでヨシゴイによく似ているが、やや大きめで羽色が著しく濃い。雄は頭頂が黒色で顔の上半分から後頸および背面にかけて栗色、風切は黒色、大雨覆は灰黄色で、喉から腹にかけて中央に黒線がある。雌は栗色の背面に細かい白斑があり、胸から腹にかけて縦斑が数本ある。ヨシ原や乾燥した草原に住み、地上やヨシの茎の間に草の茎葉を集めて皿状の巣を作る<sup>(41)</sup>。主に魚類やカエルなどを採食する。繁殖期にはヨシゴイと同様な声でオー オーと鳴く<sup>(24)</sup>。

【執筆者：村本 和之】



提供：豊田 敏則(2009.12.5撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥として本州中部以北から北海道に渡来し、局地的に繁殖する。本州南部では越冬記録もあり、各地で春秋の渡り期にまれに記録される<sup>(24)</sup>。山口県では極めてまれで、秋の渡り時期に萩市見島、下関市、山口市、周南市で、また12月に下関市豊北町で観察された記録がある。

### 選定理由

2009年の観察記録が最後で、それ以後の記録は見当たらない。

### 減少等の要因

干拓地や河川、河口のアシ原が急激に減少し、まとまった面積が残っているところはほとんどなくなっている。

- 118 -

ペリカン目 サギ科 0200900200600 <b>ササゴイ</b> <i>Butorides striata</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長約410mm。外観はゴイサギに似ているが、一回り小さく、嘴や頸が細い。頭頂および後頭の羽は帯青黒色で長く、冠羽状となる。翼は暗緑青色で、雨覆の羽縁の白色が翼をたたんだ際、顕著な模様を呈する。雌雄同色。日中は林や茂みの暗がりでは休息し、夕方から餌をあさりに出る。水田の畦や川岸などで魚を狙い、捕食する。小さなコロニーを作り繁殖する。マツやスギなどの横枝に小枝を集めて粗雑な巣を作り、淡青色無斑の卵を3-6個産む<sup>(41)</sup>。巣の近く以外ではほとんどが単独で行動する。

【執筆者：村本 和之】



提供：木下 淳美(2013.10.3撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥として全国に渡来し、本州や九州で繁殖する<sup>(41)</sup>。山口県では、標高の低い地域で確認されることが多く、公園や道路の街路樹、ケヤキ、マツ、イチヨウ、クヌギなどの樹に営巣した記録がある。

### 選定理由

かつては普通に繁殖していたが、著しく数が減っている。山口県においても2000年以降の繁殖期に確認されたサブメッシュ数は24で、1999年以前の41に比べて減少傾向が顕著である。

### 減少等の要因

河川の護岸整備による餌の減少や営巣地となる樹の減少が考えられるが、詳しいことは不明である。

- 119 -



ツル目 クイナ科 0201000200400 <b>ヒクイナ</b> <i>Porzana fusca</i> (Linnaeus, 1766)	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 NT

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長225mm。後頭部から体上面は暗緑褐色、前頭部から首、胸、腹部上部が赤褐色をしており、脇から下尾筒は暗緑褐色で白色の横縞がある。嘴は黒褐色で脚は赤色をしている。雌雄同色だが、雌の方が胸から腹部上部の赤色味が少ない。ため池や河川などの湿地性草原や水田などに生息し、主に昆虫や植物の種子などを食べる<sup>(11,23)</sup>。水辺の草の株の上などに枯れ草を集め、お椀形の巣をつくる<sup>(39)</sup>。繁殖期には、夜間から明け方にかけてキョ、キョ、キョという声で、ゆっくりとしたテンポから突然テンポを速める独特の鳴き方をする<sup>(38)</sup>。



提供：寺本 明広(2015.7.5撮影)

### 生息・生育状況

中国東北部から広東地方、朝鮮半島、日本に生息し、冬期にはミャンマー、インドシナ、タイなどへ渡る。日本では主に夏鳥として渡来するが、本州中部以西では越冬するものも多い<sup>(11)</sup>。2016-2017年の山口県内における調査では、繁殖記録は瀬戸内側が主であるが、内陸部や日本海側での記録もある。

### 選定理由

全国的に生息状況は悪化しており<sup>(11)</sup>、山口県内では瀬戸内側を中心に生息・繁殖が確認されているが、生息地の減少などによる個体数の減少が常に懸念される。

### 減少等の要因

河川改修や圃場整備などにより生息地となる湿地や水田の減少や、農薬散布による餌資源の減少が生息状況の悪化の要因と考えられる。

- 120 -

ツル目 クイナ科 0201000200700 <b>オオバン</b> <i>Fulica atra</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 -

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長390mm。体は黒く、嘴と額板は白い。足指は長くてひれがある。若鳥は全体に淡色で、額板が発達していない<sup>(23,68)</sup>。雛は早生成で、黒い綿羽に覆われ、目先や喉が赤く、額から顔と翼などには橙色の綿羽が生えている。開けた水面を泳ぎ、潜っては水草や昆虫を取るが、岸の地上で餌を取ったり休んだりすることもある。水面では尾を下げた姿勢で浮いており、首を前後に動かして泳ぐ。鳴き声はキョン、キョンと甲高い声<sup>(23)</sup>。水辺に生えたヨシなどに絡ませたり、乗せたりして枯れ草を積み重ね、大きな皿形の巣をつくる<sup>(39)</sup>。



提供：寺本 明広(2015.12.7撮影)

### 生息・生育状況

国内では九州以北で繁殖し、本州以南で越冬する<sup>(23)</sup>。湖沼や池、河川に生息し、山口県では越冬期に多く渡来するが、瀬戸内側の平野部を中心に繁殖も確認されており、2007年には長門市でも繁殖が記録された<sup>(4)</sup>。2016-2017年に山口県内で実施された調査では繁殖が5メッシュで確認された。

### 選定理由

山口県では、越冬期の記録は増加傾向にあるが、繁殖記録は局所的。生息環境となる水辺は開発などで減少しており、生息数が減少するおそれがある。

### 減少等の要因

平野部の池や湿地は圃場整備や河川改修、道路工事による開発などの影響を受けやすく、生息数に影響を与えるおそれがある。

- 121 -

カッコウ目 カッコウ科 0201100100200 <b>ジュウイチ</b> <i>Hierococyx hyperythrus</i> (Gould, 1856)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長320mm。雌雄同色<sup>(52)</sup>、頭から体上面が灰黒色。翼も灰黒色<sup>(53)</sup>、胸から体下面は成鳥では、淡い橙色。幼鳥は白く黒い縦斑がある。嘴は黒いが、基部は黄色<sup>(52)</sup>、尾羽は黒色の狭い帯が3-4本ある<sup>(53)</sup>。九州以北に夏鳥として渡来する。日本のホトトギス類では最も標高の高い所に生息している。他のホトトギス類と同様、コルリ、オオルリ、ルリビタキなどの巣にコルリの卵の色に似た青緑色の卵を托卵する。繁殖期にはジュイチ、ジュイチと次第にテンポを速め、最後はジュクジュクと声が崩れることが多い<sup>(54)</sup>。

【執筆者：立野 昌宏】



提供：藤原 正徳(2018.5.31撮影)

### 生息・生育状況

山口県内ではコルリとルリビタキの繁殖は確認されておらず、主な托卵先はオオルリの可能性が高い。寂地山、長野山などの他、宇部市、山口市などの山地でも生息の確認記録がある<sup>(46)</sup>。2007年6月には、下関市で巣立ち雛が保護された。5月の渡り時期には萩市見島や相島などでも鳴き声が聞かれる事がある。

### 選定理由

山口県内での生息確認数は少なく、鳴き声によって確認される場合が多い。

### 減少等の要因

標高の高い山地で生息しているため、実態が掴みにくいの現状である。

- 122 -

カッコウ目 カッコウ科 0201100100600 <b>カッコウ</b> <i>Cuculus canorus</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長350mm。雌雄同色。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸が青灰色で、翼と尾は黒褐色。腹からの体下面は白く、細い黒色横斑が十数本ある。足は橙黄色。幼鳥は全体に褐色みが強く、頭から胸にかけても細い横斑が多数ある。翼上面や背には赤褐色や白色の斑が多数あり、縞模様のようにになっている<sup>(24)</sup>。他の鳥の巣に産卵して育てさせる托卵という繁殖行為を行う。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2010.6.3撮影)

### 生息・生育状況

ユーラシア大陸のほぼ全域で繁殖する。日本では夏鳥として九州以北で繁殖し、林縁部や高原などの明るい環境に生息する<sup>(24)</sup>。山口県では山間部や高原などを中心に、平地でもでさえずりが聞かれる。

### 選定理由

山口県中部を中心にさえずりの記録はあるが、通過個体ばかりで、確実に繁殖しているのは美祢市秋吉台のみ。飛来数も少ない。

### 減少等の要因

生息環境の悪化はもとより、特殊な繁殖形態ゆえに生息数は少なく、宿主の生息状況や対抗手段などの影響を受けやすい。また越冬地の環境悪化や狩猟の影響も懸念される<sup>(62,63)</sup>。

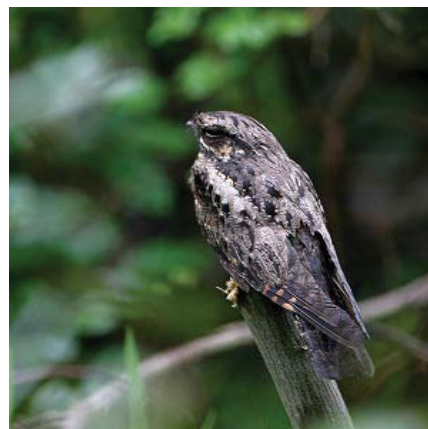
- 123 -

ヨタカ目 ヨタカ科 0201200100100 <b>ヨタカ</b> <i>Caprimulgus indicus</i> Latham, 1790	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 NT

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長約290mm。周遊ほぼ同色で頭部は多くて平たい。嘴は小さいが大きくひらき、根元には剛毛がある。頭上から背は灰色で細かい黒い虫くい状斑がある。翼は細長く、灰色で黒色と橙褐色の複雑な斑紋がある。夕方から活動し、飛翔中の昆虫をとらえる。繁殖期にはキョキヨキヨキヨと長く続けて鳴く。昼間は樹上で横枝に沿って止まっている。飛翔時はほとんど羽音をたてない<sup>(41)</sup>。



提供：村本 和之(2004.5.4撮影)

### 生息・生育状況

九州以北の低山に渡来し、草原、林縁、明るい林などに生息する夏鳥で、インドからアムール、スリランカまで広く繁殖分布し、ジャワやボルネオまで越冬する<sup>(41)</sup>。山口市、萩市、美祢市などでさえずりが記録され、繁殖の可能性がある。

### 選定理由

1999年以前の繁殖の可能性があると確認されたサブメッシュ数は14であったが、2000年から2017年までのサブメッシュ数は5であり、繁殖地が急激に減少していると考えられる。

### 減少等の要因

自然林の減少と人工林化による繁殖環境の悪化や、越冬地である東南アジアの経済発展に伴う大規模な森林伐採によって環境が悪化していることが原因と思われる。

- 124 -

アマツバメ目 アマツバメ科 0201300100200 <b>アマツバメ</b> <i>Apus pacificus</i> (Latham, 1802)	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 -

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長190mm、翼開長430mm。翼は飛翔時鎌形で尾は深い凹尾。雌雄同色で成鳥は上面が黒褐色で、腰と喉が白い。胸以下の下面は黒褐色の細かい横斑がある<sup>(23)</sup>。夏鳥として渡来、高山や海岸の断崖に営巣し近くを数十羽の群れで飛びまわる<sup>(23,43,44)</sup>。春、秋の渡り時期には平地でも観察される<sup>(6)</sup>。日中はほとんど飛びながら昆虫を捕食したり、交尾や睡眠も空中でするとされている<sup>(6,43,44)</sup>。



提供：豊田 敏則(2018.9.23撮影)

### 生息・生育状況

繁殖期には瀬戸内海や日本海の島嶼部で群れが観察されているため繁殖の可能性ある<sup>(6)</sup>。上関町の離島の断崖等で集団繁殖地が確認されたが、他では山地や海岸部で散発的に記録されるのみである<sup>(6,45,46)</sup>。

### 選定理由

生息少数で繁殖地や生息域が局地的に限定されまれである<sup>(6,45,46)</sup>。繁殖状況と分布は不明な点が多い。

### 減少等の要因

繁殖に適した離島の断崖等は多くなく、新たな繁殖地は難しいかもしれない。現在の繁殖地も釣り人による人的攪乱や、ネズミやカラスの捕食圧がかかる可能性がある。

- 125 -

チドリ目 チドリ科

0201400100200

## ケリ

*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)

### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	DD

### 形態・生態

全長355mm。足の長い大形のチドリ。頭部から上胸は暗灰青色、背、肩羽、腰は茶褐色、上尾筒と尾は白く、尾の先には黒斑がある。目先には黄色いまるい裸出部がある。下胸は茶褐色、腹は白色、両者の境には黒色部がある。初列風切と初列雨覆は黒、次列風切と小翼羽は白、雨覆は背と同様。嘴は橙黄色で先は黒、足は黄色。巣や雛の近くに人、犬、カラス等の外敵が近づくとキキツ、キキツと鳴いて飛びまわり急降下して威嚇する。地上に浅い窪みを作って巣材を敷いたり水田中のやや高い所や畦に巣材を積んで皿形の巣を作り4卵を産む<sup>(19)</sup>。

【執筆者：小林 繁樹】



提供：木下 淳美(2017.9.2撮影)

### 生息・生育状況

留鳥として近畿地方以北の本州に分布し局地的に繁殖する<sup>(20)</sup>としているが、山口県ではまれな冬鳥<sup>(22,42)</sup>で、繁殖期にも局所的に生息し1989年に岩国市で初めて繁殖が確認<sup>(69)</sup>され、それ以降も同所で2007年、2013年、2015年に、下関市で2014年に抱卵・幼鳥等の記録がある<sup>(4)</sup>。

### 選定理由

本種の繁殖地としては福岡・佐賀・熊本<sup>(48)</sup>とともに最も西南部の地域にあたり繁殖個体群の規模は小さく、営巣環境の水田やハス田は人的攪乱の圧力が高く、容易に消滅する可能性がある。

### 減少等の要因

営巣環境である水田やハス田などは本種の繁殖時期に荒起こし、植え付けなどの農耕作業の繁忙期と重なり、営巣地の人的攪乱が予想され、安定した営巣環境が得にくい。

- 126 -

チドリ目 チドリ科

0201400100600

## イカルチドリ

*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863

### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

### 形態・生態

全長210mm。雌雄同色、体色はコチドリに似ているが、コチドリより大きい。過眼線やアイリングは淡く目立たない。前頭部は黒く、頭頂部から体上面は褐色で体下面は白い。嘴は黒く長めで、足は黄色。胸から後脛に続く細いリング状の黒斑がある<sup>(52)</sup>。繁殖期には翼を浅くはばたいて飛びまわり、ピョ、ピョ、ピョと連続的に鳴く。コチドリ同様、近くに雛がいる場合には偽傷行動を行う。本州北部及び北海道では夏鳥として渡来し、冬には暖地に移動する。南西諸島では冬鳥。その他の地方では留鳥として周年生息する場合も多い<sup>(53)</sup>。

【執筆者：立野 昌宏】



提供：木下 淳美(2014.1.12撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では瀬戸内海側の大きな河川の中流から上流に多くみられ、コチドリ、シロチドリよりも内陸部で記録されている。営巣場所は河原以外に、バラスの駐車場や線路、造成地などの記録がある<sup>(46)</sup>。

### 選定理由

減少傾向であり、山口県内ではコチドリなどに比べて生息や繁殖が確認されることが少ない。

### 減少等の要因

河川の中流域の河原が主な繁殖地であり、洪水や水位の変動による環境の変化の影響を受けやすい他、河原に立ち入る人間なども繁殖期においては脅威となる。

- 127 -

チドリ目 ミヤコドリ科 0201400200100 <b>ミヤコドリ</b> <i>Haematopus ostralegus</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長450mm。嘴は少し長くて先が少し太く、足は比較的短い。頭部、頸、上面は光沢のある黒色で、翼は黒くて飛翔中は太い白帯が出る。腰から尾は白く、尾の先は黒い。胸から腹は黒い。嘴は赤く足は淡紅色である。飛翔時は白い翼帯が目立つ<sup>(24)</sup>。ピリーツまたはキリーツという大きな声で鳴く<sup>(23)</sup>。餌は主に貝類やゴカイなどで、貝に嘴をさし込み広げて食べる<sup>(41)</sup>。

【執筆者：村本 和之】



提供：渡邊 徹(2015.1.20撮影)

### 生息・生育状況

数少ない冬鳥または旅鳥として、河口や海岸の干潟、砂浜、磯などに渡来する<sup>(23)</sup>。瀬戸内側で観察されることが多く、下関市彦島や角島、長門市などでの観察記録もある。

### 選定理由

下関市彦島竹の子島一帯にはミヤコドリがほぼ毎年越冬し、貴重である。

### 減少等の要因

全国的な干潟の減少など、開発により生息環境が悪化している。

- 128 -

チドリ目 シギ科 0201400400100 <b>ヤマシギ</b> <i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長340mm、ずんぐりとした体型のシギ。頭は灰色で頭頂から後頭部に黒い横斑がある。体の上面と雨覆は赤褐色、黒、灰白色の複雑な斑紋があり<sup>(23)</sup>、下面は淡黄色で黒い横縞がある<sup>(6)</sup>。頭頂はとがり、目は頭頂近くにある。ユーラシア大陸の中北部で繁殖し、冬は日本、中国、東南アジアなどで越冬する。日本では本州中部以北の林で繁殖し、冬は暖地に移る。林の中で生息し、夜間に畑や水田、湿地などでミミズなどを捕食する。夜行性の鳥である<sup>(6)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：藤原 正徳(2013.6.18撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬鳥として渡来する。昼間は林の中に生息し、夜行性であるため、観察例は少ない。過去には山間部での観察例が多いが<sup>(6)</sup>、平地で沿岸部の山口市阿知須きらら浜自然観察公園での観察記録もある。ただし、それ以外の記録は、落鳥、保護鳥が大半をしめる。

### 選定理由

観察記録が非常に少なく、渡来数の減少が危惧される。渡来地や採食地である林、畑、水田、湿地などは都市開発され易い場所であり、過剰な開発の抑止力として重要種である。

### 減少等の要因

開発により渡来地、採食地の消失、減少、悪化が考えられる。

- 129 -

チドリ目 シギ科 0201400400900 <b>シベリアオオハシシギ</b> <i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth, 1848)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	DD

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長330mmで嘴はまっすぐで太くて長く、足も長い。夏羽では上面が赤褐色で、頭や背に黒褐色の縦斑があり、背や翼の羽毛には白い羽縁がある。顔、頸、胸、脇は赤褐色で、脇には黒褐色の黄斑がある。冬羽では頭が灰褐色で黒い縦斑があり、下面は白くて頸や胸側には灰褐色の斑がある<sup>(23)</sup>。餌は巻貝や昆虫などである<sup>(41)</sup>。



提供：藤原 正徳(1992.5.9撮影)

### 生息・生育状況

まれな旅鳥として干潟や入り江などに渡来する。2000年以降は、2005年5月に下関市小月町木屋川河口で観察された記録があるのみである。

### 選定理由

干潟に生息し泥湿地を好む。個体数が少なく、山口県では極まれな旅鳥として記録されている。

### 減少等の要因

全国的な干潟の減少など、開発により生息環境が悪化している。

- 130 -

チドリ目 タマシギ科 0201400600100 <b>タマシギ</b> <i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長235mmで、雄よりも雌の方が美しい色彩をしている。雌は額から頸部にかけて赤褐色で、背は緑がかったブロンズをしている<sup>(24)</sup>。雄は雌よりも褐色味が強い。雄雌ともに目の周辺とその後方は勾玉のような模様をしており<sup>(24)</sup>、名前の由来となっている。本種は繁殖における雌雄の役割が一般の鳥とは逆で、縄張り宣言をし、積極的に求愛するのは雌、巣を作って卵を抱き、雛の世話をするのは雄である。1雌多雄の繁殖形式の鳥としても知られており、雌は1羽の雄とつがいになり卵を産むと、その巣を離れて別の雄とつがいになる<sup>(70)</sup>。



提供：藤原 正徳(2012.8.31撮影)

### 生息・生育状況

主に瀬戸内側や内陸部の水田地帯、川、湿地などで確認される。岩国市、山口市、宇部市などの水田やハス田、休耕田で繁殖記録がある。

### 選定理由

1999年以前に繁殖が確認されたサブメッシュ数は11であったが、2000年から2017年までのサブメッシュ数は3であり、繁殖地が急激に減少していると考えられる。

### 減少等の要因

水田地帯、川、湿地などに営巣するが、開発で埋め立てられたり荒廃地化するなど繁殖に不適な環境になることで、餌資源となる動物も同時に追い詰められている。

- 131 -

チドリ目 カモメ科

0201400800500

### ウミネコ

*Larus crassirostris* Vieillot, 1818

#### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

#### 形態・生態

全長約4650mm。背、肩羽、翼の上面は青灰黒色、外側初列風切の先端は黒く、白い小斑点がある個体もいる。内側初列風切と次列風切の先は白い。尾は白くて先端近くに黒帯がある。体の他の部分は白色。目の縁は赤い。嘴は濃黄色で先端近くは黒と赤の斑があり、足は緑黄色または黄色。冬羽では頭部に褐色の斑点が生じる。幼鳥は体は濃い褐色で、額、目先、喉、尾の基部は淡色、初列風切は黒い。嘴は先端が黒く基部は肉色。足も肉色<sup>(19)</sup>。

【執筆者：小林 繁樹】



提供：小林 繁樹(2016.9.8撮影)

#### 生息・生育状況

日本では留鳥として一年中見られ、北海道から九州まで各地に集団繁殖地がある<sup>(19)</sup>。山口県内では留鳥で、繁殖期には萩市や長門市周辺の日本海側の島嶼で繁殖するほか、瀬戸内側では屋代島、長島、平郡島周辺に記録が集中する<sup>(45,46)</sup>。萩市内の港湾でも新繁殖地が確認<sup>(71)</sup>されたが、瀬戸内側では未確認。

#### 選定理由

山口県内では日本海側の島嶼<sup>(45,46)</sup>や沿岸部で繁殖<sup>(71)</sup>が確認されているが、コロニーの規模が小さく繁殖環境が脆弱である。

#### 減少等の要因

繁殖は日本海側の島嶼や断崖などであり、小規模コロニーのため、外敵であるカラス類に雛や卵を捕食されたり、磯釣りなどで人が繁殖地に立ち入り、繁殖環境を脅かす可能性がある。

- 132 -

タカ目 ミサゴ科

0201500100100

### ミサゴ

*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)

#### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	NT

#### 形態・生態

全長雄540mm、雌640mm、翼開長1570-1740mm、翼は細長い。背、翼など体の上面は黒褐色で、顔から腹、翼の下面は白色である。頭には短い冠羽があり、胸には黒褐色の帯がある<sup>(6)</sup>。飛翔中、下から見ると白っぽく見える。全国的に生息し、北日本では暖地に移動するものもいる。海岸や河口、大きな湖沼で見られ、海岸の岩の上や崖の岩棚、海岸や河川、湖沼近くの大木で営巣する。最近は鉄塔などの人工物での利用も増加している。空中で停空飛翔から水中に飛び込み、足指の爪で魚を捕らえる<sup>(6)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：開作 秀敏(2015.3.23撮影)

#### 生息・生育状況

主に海岸の岩場に生息、繁殖する。瀬戸内海側より日本海側に多く見られるが、内陸部の大きな河川や湖沼周辺でも見られる。繁殖期は、主に4月から7月上旬であるが、3月から始める個体もいる。繁殖地では営巣の間隔が近い場所もあり、営巣に適した場所の減少が伺える。

#### 選定理由

海岸、河川、湖沼周辺での開発に伴い、生息及び繁殖適地の減少や環境悪化が懸念され、繁殖数の増加が期待できない。食物連鎖の頂点であり、環境指標種として重要である。

#### 減少等の要因

海岸、河口、湖沼周辺の開発による採食地や繁殖地の減少。釣り人や海洋レジャーによる営巣地への進入が考えられる。

- 133 -

タカ目 タカ科 0201500200700 <b>ハイイロチュウヒ</b> <i>Circus cyaneus</i> (Linnaeus, 1766)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長雄450mm、雌500mm。雌雄で羽色が全く違い、雄成鳥は頭部からの上面と、顔から胸までが灰色で、体下面は白い。翼下面は先端部が黒い。雌成鳥は全体に暗灰褐色で、頭頸部と腹に褐色の縦斑がある。顔は顔盤に沿って白線があり、特徴的な顔つきをしている。幼鳥は雌に似ている。性別、年齢を問わず上尾筒が白く、帯のように見える。滑翔時には翼を少し持ち上げて浅いV字型になるのが特徴。草地すれすれを滑翔し、小鳥などを捕食する<sup>(24)</sup>。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2015.1.17撮影)

### 生息・生育状況

北半球の中緯度～高緯度地域で広く繁殖する。日本には冬鳥として全国に飛来する<sup>(24)</sup>。ヨシ原や草地を採餌場所やねぐらとして利用する。山口県では瀬戸内を中心に記録がある。

### 選定理由

全国的に飛来数が少なく局地的で、山口県でも飛来地は限られる。

### 減少等の要因

生息地のヨシ原や草地は開発されやすく、近年では太陽光発電の施設になってしまう例が増えている。

- 134 -

タカ目 タカ科 0201500201000 <b>ツミ</b> <i>Accipiter gularis</i> (Temminck & Schlegel, 1844)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

雄は全長270mm。雌は全長300mm<sup>(52)</sup>の小型のタカ類。雄の上面は青みがかった灰黒色。胸から脇腹にかけては、白に近いものから赤銅色まで様々で目は赤みのある黒色。雌は上面が濃い灰黒色。下面は汚白色の地に、黒褐色の横縞があり<sup>(72)</sup>、目は黄色。全国に分布し、夏季は低山帯に、冬季は低山帯および平地にも現れるが、フィリピン、東南アジア方面に渡るものもいる。3-4回羽ばたいて滑翔を交えて直線的に飛ぶことが多い<sup>(53)</sup>。待ち伏せ型の狩り<sup>(72)</sup>をして、主に小鳥を食べるが、ヤチネズミなどの小型哺乳類や、爬虫類、昆虫も食べる<sup>(53)</sup>。

【執筆者：立野 昌宏】



提供：藤原 正徳(2017.9.25撮影)

### 生息・生育状況

主に低山帯の落葉広葉樹林や雑木林の<sup>(53)</sup>平均樹高18.6m程<sup>(72)</sup>の枝上に小枝を積み重ねた皿型の巣を作る<sup>(53)</sup>。関東では一時期住宅地に進出したが、カラス類の増加で減少傾向にある<sup>(72)</sup>。山口県内での繁殖記録は無く、冬鳥として越冬している個体が確認されているが、数は少ない。

### 選定理由

生態系の頂点に位置する鳥であり、山口県内に限らず西日本では繁殖数が少ないとされている。

### 減少等の要因

山口県内での実態はよく分かっておらず生息状況の調査が必要と思われる。

- 135 -



タカ目 タカ科 0201500201100 <b>ハイタカ</b> <i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	NT

### 形態・生態

【執筆者：弘津 聖也】

全長雄300-330mm、雌370-400mm<sup>(11)</sup>。雌の方が雄より大きい<sup>(23)</sup>。雄の上面は暗青灰色で、下面は白色の地に橙褐色の横斑がある<sup>(6, 23, 43, 44)</sup>。白い眉斑は小さく目立つものは少ない<sup>(6)</sup>。雌の上面は灰褐色で下面は白地に褐色の横斑がある<sup>(6, 43, 44)</sup>。ユーラシアの中高緯度に広く分布する<sup>(6, 11)</sup>。日本では北海道・本州・四国の一部で繁殖するほか、全国に冬鳥として渡来する<sup>(6, 11, 43, 44, 60)</sup>。



提供：木下 淳美(2017. 10. 30撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬鳥として越冬する記録がほとんどで<sup>(6, 45, 46)</sup>、瀬戸内海側の低地での越冬記録が多い。平地から山地の林・河川敷・農耕地に生息する<sup>(6)</sup>。林内や林縁で幅広い翼による巧みな動きで鳥類を主にとる<sup>(43, 44)</sup>。越冬地では小鳥類の集まる場所の近くで生活している個体が多い<sup>(6)</sup>。

### 選定理由

生態系の頂点に位置する鳥であり、個体数は多くない<sup>(6)</sup>。

### 減少等の要因

個体数の動向は不明であるが森林伐採や土地造成によって生息環境が悪化しているところがある<sup>(11)</sup>。

- 136 -

タカ目 タカ科 0201500201400 <b>ノスリ</b> <i>Buteo buteo</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

雄は全長約520mm。雌は約570mm。ずんぐりとした体型で雌雄同色。羽色には変異が多い。成鳥は頭部から胸、体下面は白く、額、喉はこげ茶色で、胸には縦斑がある。体上面はこげ茶で淡色羽縁がある。成鳥の虹彩は暗色、若鳥は淡黄色である。留鳥または漂鳥として北海道から四国の山地で繁殖する。冬季には大陸から全国の農耕地、干拓地に渡来する。電柱や杭の上で待ち伏せしたり、低空飛翔で狙いをつけ急降下して獲物を捕える。ネズミやモグラなどの小型哺乳類<sup>(52)</sup>の他、両生類、昆虫、爬虫類、鳥類などを食べる<sup>(46)</sup>。



提供：木下 淳美(2017. 12. 22撮影)

### 生息・生育状況

山口県には主に冬鳥として渡来し、山口県内各地の山地や農耕地などに生息する。繁殖期の観察記録も少数あるが<sup>(46)</sup>、確実な繁殖記録はない。近隣では、大分県、熊本県での繁殖が少数報告されている<sup>(73, 74)</sup>。

### 選定理由

生態系の頂点に位置する鳥であり、環境の変化の影響を受けやすい。冬季には山口県内に飛来するが、繁殖の報告はない。

### 減少等の要因

冬季に観察された件数は20年前と比較すると増加している。しかしながら主な狩場である農耕地や干拓地は減少傾向にあるため今後の経過を見守る必要がある。

- 137 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100100 <b>オオコノハズク</b> <i>Otus lempiji</i> (Horsfield, 1821)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長約240mm。雌雄同色の小型のフクロウで長い羽角と橙色の虹彩が特徴。頭部から体上面は灰色みのある褐色で、顔盤は黒く縁取られている<sup>(52)</sup>。小笠原諸島を除く全国に分布する<sup>(75)</sup>。北日本ではおもに夏鳥、本州南部以南では留鳥または漂鳥。夏季には山地の針葉樹の密生したところに生息し、冬季は平地や低山の森へ移動する<sup>(53)</sup>。このため都市部の公園などの緑地でも越冬する個体が観察されることがある<sup>(76)</sup>。夕方から夜にかけて行動し、小鳥類、ネズミ類、モグラなどを好んで餌とし、カエルやカニ、昆虫類、クモなども食べる<sup>(53)</sup>。



提供：立野 昌宏(2017.6.4撮影)

### 生息・生育状況

主に樹洞で繁殖するが、巣箱も利用する。山口県内では1998年から毎年、周南市鹿野の山林に架設された巣箱で営巣しているが、これは本種が巣箱を利用した日本で最初の例である<sup>(77)</sup>。5-7月に4-5個の卵を産む<sup>(54)</sup>。抱卵期間は25日と育雛期間は30日<sup>(78)</sup>。

### 選定理由

全国的に数は少なく、山口県内でも冬季に中西部でまれに見られることがある程度、繁殖場所も20年前から増えていない。このため開発などの環境破壊の影響で容易にいなくなってしまう危険がある。

### 減少等の要因

樹洞のある巨木が減少したことが要因としてあげられるが、そうした森林環境の回復には非常に時間がかかるため、それまでの間、巣箱による繁殖を試みるのが有効であると思われる。

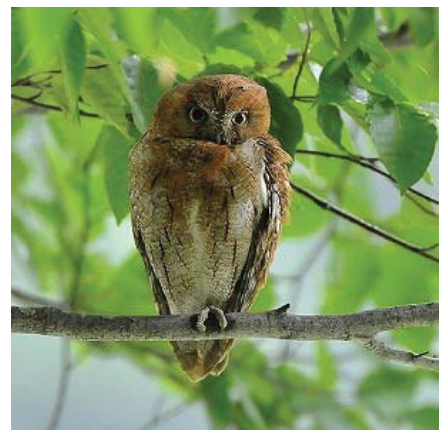
- 138 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100200 <b>コノハズク</b> <i>Otus sunia</i> (Hodgson, 1836)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長約200mm。日本最小のフクロウ類。頭部から体上面は灰色みのある褐色で、羽角があるが、寝かせていて見えないことが多い。体上面には肩羽の白斑が繋がって線状に見える模様がある。体下面は黒っぽい細い縦斑がある。少数だが上面が橙褐色を帯びる赤色型が見られることもある<sup>(52)</sup>。北海道から、本州、四国、九州に夏鳥として渡来するが、東北地方北部から北海道では平地から山地に生息し、その他の地方では山地の山林、特に北アルプス地方では1000-1600mの針葉樹林に生息する。昼は樹間で休息、夜間に採食して主に昆虫類を餌とする<sup>(53)</sup>。



提供：豊田 敏則(2011.7.21撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では5月の渡りの時期に鳴き声が聞かれるが、繁殖記録は1995年に岩国市周東町で2羽の雛が保護(内1羽死亡)された例があるのみで(46)、その後は明確な繁殖は記録されていない。

### 選定理由

山口県内では生息するのに適した樹洞のある森林は減少しており、生息数は極めて少ない。

### 減少等の要因

夜行性でもあり非常に確認しにくい。山口県内には少数ながら繁殖しているものと思われるが、実態はよくわかっておらず生息状況の調査が必要である。

- 139 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100300 <b>フクロウ</b> <i>Strix uralensis</i> Pallas, 1771	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：開作 秀敏】

全長500mm、頭部が大きく顔盤がよく発達しており、羽角はない。頭部から背部にかけ灰褐色で褐色の縦斑があり、体の下面は淡い灰褐色で褐色の縦斑がある。虹彩は濃い黒褐色。雌雄同色である<sup>(6)</sup>。九州から北海道で留鳥として生息、繁殖している<sup>(46)</sup>。主に平地から山地の林に棲み、大木のある林や社寺林などに生息している。夕方から活動を始め、ネズミ類、小鳥類、爬虫類、両生類などを捕食する。大木の樹洞に営巣するが、土手の穴、建物の屋根裏、タカ類の古巣、巣箱なども利用する<sup>(46)</sup>。



提供：開作 秀敏(2012.5.21撮影)

### 生息・生育状況

山口県内全域で生息が確認されているが数は少ない。繁殖期は2-5月で雛の数は1-3羽が多い。繁殖記録は林や社寺林の樹洞、廃屋の屋根裏等が報告されている。雛が巣から落下する機会が多く、他の動物に捕食される危険が高い。

### 選定理由

生息、繁殖環境が悪化、消失しており生息数が減少している。森林部で生息する猛禽類として生態系の頂点であり、環境指標種として重要である。

### 減少等の要因

産業、レジャー等の開発により繁殖環境の消失、悪化が顕著である。殺鼠剤や農薬に汚染された動物の捕食による生体や繁殖力への影響が懸念される。

- 140 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100400 <b>アオバズク</b> <i>Ninox scutulata</i> (Raffles, 1822)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長約290mm、翼開長660-705mm。耳のない尾の長いフクロウ。頭部から背、肩羽、腰、尾羽は黒褐色、尾羽には黒色の横帯が数本ある。目は金色。胸から腹は黄白色の地に、黒褐色の太い縦斑。日中は木の枝に止まり夜間に活動して大型のガ、セミ、コガネムシ等を主として捕えるが小鳥やネズミも捕る。夜間街燈の周囲を飛んで光に集まる昆虫を捕る事もある。夜、枯れ枝・電線等に止まってホーホー、ホーホーと2声ずつ連続して鳴く。木の穴に産卵するが人家の屋根裏に産卵したり巣箱利用例がある。1巣の卵数は3-5個、卵は純白無斑<sup>(19)</sup>。



提供：藤原 正徳(2012.10.28撮影)

### 生息・生育状況

平地から山地の林に生息し、村落付近の神社や寺の林に普通にすんでいたが、近年市街地では少なくなった<sup>(19)</sup>。山口県内には夏鳥としてほぼ全域に渡来・繁殖するが、山口県北部や西部では記録が少ない。留鳥のフクロウよりも記録メッシュが少ない<sup>(45,46)</sup>。

### 選定理由

生息数が少なく、営巣には樹洞のある大木は必要で、そのような場所は社寺林や自然度の高い壮齢の森林が必要で生息地の消失、悪化が懸念される。

### 減少等の要因

営巣場所が大木の樹洞等であり生息、繁殖環境の減少。殺鼠剤や農薬に汚染された動物の捕食で生物濃縮による生体や卵・雛への影響が懸念される。樹洞営巣性のため保護には巣箱架設が有効である。

- 141 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100500 <b>トラフズク</b> <i>Asio otus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

#### 形態・生態

全長380mm。雌雄ほぼ同色。頭にウサギの耳のような大きな羽角があり、顔盤が発達した中型のフクロウ類。成鳥は頭部からの上面は黒褐色、茶褐色、灰白色などの複雑な模様になっており、胸からの体下面はバフ色で褐色の縦斑と短い横斑があるが、個体差が大きい。虹彩は橙色。嘴は黒く、足指まで羽毛がある。夜行性で、主にネズミ類を捕食し、越冬期は樹木の枝にねぐらをとる<sup>(24)</sup>。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：藤原 正徳(2010.12.2撮影)

#### 生息・生育状況

北半球の中緯度地域で広く繁殖する。日本では本州中部以北で局地的に繁殖し、本州中部以南では冬鳥<sup>(24)</sup>。山口県でも冬鳥としてネズミが多く生息する丈の低い草地や農耕地などに飛来する。

#### 選定理由

山口県への飛来数は少なく、分布も局地的。

#### 減少等の要因

繁殖に適した樹洞ができるような大木はかなり減少しており、またネズミ類が生息する草地や農耕地も減少している。

- 142 -

フクロウ目 フクロウ科 0201600100600 <b>コミミズク</b> <i>Asio flammeus</i> (Pontoppidan, 1763)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

#### 形態・生態

全長350-410mm、翼開長940-1040mm<sup>(23)</sup>。羽角が短く顔盤が発達した中型のフクロウ。頭部から上面は黒褐色、淡橙褐色、白色が混じる複雑な模様で、胸から下面は白または淡橙色で褐色の縦斑がある<sup>(6)</sup>。初列風切基部は橙褐色で無斑のため飛翔時にはよく目立つ。目の周囲は黒く、虹彩は黄色。雌雄同色である。数少ない冬鳥として平地から山地の草原や農耕地、干拓地、河川敷などに渡来する。昼間は草地の中において夕方から活動を始め、草地の上をゆっくりとした羽ばたきで飛翔し、ネズミ類や昆虫を捕食する<sup>(23)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：藤原 正徳(1995.10.29撮影)

#### 生息・生育状況

ヨシ原や広い草地を好み、山口県内では、海岸近くの干拓地、広い農耕地、草地などに冬鳥として渡来する<sup>(6)</sup>。阿知須干拓、防府市台道干拓、山口市幸崎などの干拓地や防府市横曽根川などの河川の草地などで記録がある。1-2羽での観察例が多く、生息地は局地的で数は少ない。

#### 選定理由

山口県内での生息数は少なく、生息場所も局所的であるため、環境悪化による越冬地に渡来する個体数の減少が懸念される。

#### 減少等の要因

生息場所に適した広い干拓地や農耕地などが少なく、耕作放棄や土地開発による更なる生息環境の悪化や減少が考えられる。また、殺鼠剤などに汚染された餌動物の捕食による影響も考えられる。

- 143 -

キツツキ目 キツツキ科 0201900100300 <b>オオアカゲラ</b> <i>Dendrocopos leucotos</i> (Bechstein, 1802)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長280mm、上面は雄では頭頂部が赤色で雌では黒色。後頸から背、肩羽、上尾筒は黒色で、腰は白色。翼は黒色で白斑が横縞状になっている。尾は黒色でくさび型。下面は顔から喉、胸、腹にかけて淡赤褐色で白っぽく見え、腹から下腹部にかけては淡赤色である。黒色の頸線が長く伸び、腹、脇には細長い黒斑が散在する。嘴及び脚は灰黒色である<sup>(6)</sup>。留鳥として北海道から奄美大島までの森林に生息している。営巣は落葉広葉樹林や混交林中の樹木の幹に直径6-7cm、深さ40cm位の穴を掘り巣とする。産卵期は4-5月で3-5個の卵を産む<sup>(46)</sup>。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：藤原 正徳(1994.5.29撮影)

### 生息・生育状況

山口県内での観察記録は少なく、前回調査までは山口市徳地滑山での記録と、錦町宇佐小学校で保護された2例のみであったが<sup>(6)</sup>、今回の調査では萩市高津、山口市地蔵峠・徳地船路・21世紀の森などでの観察記録がある。また、2006年には周南市鹿野で山口県内初となる繁殖が記録された。

### 選定理由

山口県内での観察記録が少なく、生息場所が県中部や県東部の深い森林部に限られ局所的。生息数は非常に少ないと考えられる。森林部の開発に伴う環境指標種として重要である。

### 減少等の要因

林道建設や天然林伐採などに伴う生息環境の悪化や減少。また繁殖に適した大径木の減少などが考えられる。

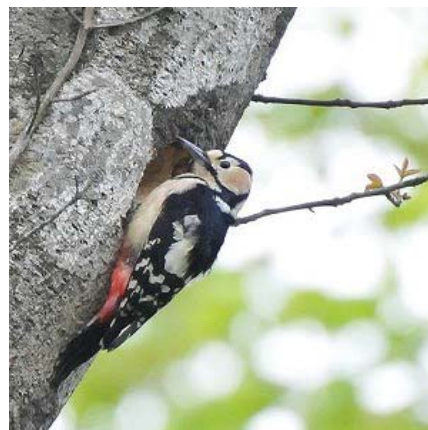
- 144 -

キツツキ目 キツツキ科 0201900100400 <b>アカゲラ</b> <i>Dendrocopos major</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長約235mm。雄は額、顔、頸側、胸、腹は淡黄褐色。頭上は黒、後頭は赤、後頸、背、肩羽、腰、上尾筒、中央尾羽は黒、肩羽の先は白、外側尾羽は白地に黒色横斑。下嘴の根元から頸側、胸側にかけて黒い線があり、下腹と下尾筒は赤。翼の上面は黒くて風切には白斑、中雨覆および大雨覆の内側のものは白。嘴は黒、足は灰黒色。雌は雄に似ているが後頭の赤色部が黒い。幼鳥は雌雄とも頭上が暗赤色。木の幹に縦に止まり嘴でつついて割れ目や樹皮下の昆虫等をあさる。枯れ木の幹に穴を掘り産卵。1巣卵数4-6個で卵は純白無斑<sup>(19)</sup>。

【執筆者：小林 繁樹】



提供：豊田 敏則(2008.5.7撮影)

### 生息・生育状況

留鳥または漂鳥として北海道から本州の平地から山地の森林に生息し、四国でも少数が生息する<sup>(20)</sup>。主に山口県東部から北部にかけての標高の高い山地で記録され山口県西部には生息しない<sup>(45,46)</sup>。周南市鹿野<sup>(46)</sup>、岩国市錦町<sup>(4,79)</sup>では繁殖も確認されている。

### 選定理由

個体数が少なく生息域が山口県東部から北部の標高の高い山地に限られ連続的でなく、継続的な個体群の維持が困難と思われる。アオゲラよりも自然度の高い森林にすむ傾向があり繁殖環境が矮小。

### 減少等の要因

山口県内では比較的標高の高い限られた場所に生息する上に、ブナ林等のある生息に適した環境が少ない事、枯れ木に巣穴を掘る繁殖習性から営巣に適した樹木のある森林が少ないことがあげられる。

- 145 -

ハヤブサ目 ハヤブサ科

0202000100100

## チョウゲンボウ

*Falco tinnunculus* Linnaeus, 1758

カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

### 形態・生態

全長雄330mm、雌390mm。雄成鳥は頭頸部、顔、腰から尾にかけて青灰色。背、翼上面は茶褐色。尾は長く、先端には太い黒色横帯がある。喉からの体下面はバフ色で、黒褐色の縦斑が多数ある。雌成鳥は頭部から尾までの上面が茶褐色で、頭頂から後頸には細い縦斑が、背から翼上面には黒色横斑が密にある。尾には黒色の横帯が数本あり、尾先の横帯は太い。雌雄とも頬に黒いひげ状の斑がある。幼鳥は雌に似る。翼は細長くて、飛翔時に先端がとがる。ホバリングをよく行い、草地や農耕地などで昆虫やネズミなどを捕食する<sup>(24)</sup>。

【執筆者：渡邊 徹】



提供：渡邊 徹(2014.1.4撮影)

### 生息・生育状況

ユーラシア大陸、アフリカ大陸で広く繁殖する。日本では本州中部以北の崖や林で繁殖し、本州中部以南では冬鳥<sup>(24)</sup>。山口県では冬鳥として農耕地を中心に飛来し、電柱や電線に止まって獲物を探す様子がよく見られる。

### 選定理由

生態系の上位に位置する猛禽類であるため、個体数は少なく、好適な生息地も限られる。

### 減少等の要因

繁殖に適した崖や林は減少しているが、近年では都市部のビルなどの人工物で繁殖する例が増えている<sup>(24)</sup>。山口県では前回の調査時より記録数が8倍強と増加している。

- 146 -

ハヤブサ目 ハヤブサ科

0202000100300

## コチョウゲンボウ

*Falco columbarius* Linnaeus, 1758

カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

### 形態・生態

雄は全長約280mm。雌は約320mm。小型のハヤブサ類で、雄は頭部から背面が青灰色で、顔はやや橙色がかり体下面は橙褐色でレンガ色の縦斑がある。雌は頭頂から体上面がこげ茶色で淡色羽縁がある。目の下はひげ状の斑があり、体下面には太いレンガ色の縦斑がある<sup>(52)</sup>。全国の農地、干拓地、原野など開けた場所に冬渡来する<sup>(80)</sup>。力のこもったはばたきで直線的に飛び、滑空を交える<sup>(54)</sup>。見晴らしの良い少し高い所に止まって休息したり、獲物を探したりしている。獲物は鳥類が多く、哺乳類は少ない。まれに蛇類、トカゲ類、カエルなどもとる<sup>(80)</sup>。

【執筆者：立野 昌宏】



提供：渡邊 徹(2017.2.14撮影)

### 生息・生育状況

冬鳥であり日本では繁殖を行わない<sup>(80)</sup>。山口県内では瀬戸内側の平野部で見られることが多い。早朝にねぐらから一定の採食場所に行き、日中は1羽で行動することが普通だが、夕方のねぐら入り前にヨシ原に突き出た低木や樹木に集合する。数羽が同じ場所をねぐらにすることも<sup>(72)</sup>ある。

### 選定理由

生態系の頂点に位置する鳥であり、山口県内の生息確認数は20年前と比べると僅かながら数は増えているが少ない。

### 減少等の要因

生息環境である広いヨシ原や農耕地が失われており、こうした環境の保全を考えて行く必要がある。

- 147 -

スズメ目 サンショウクイ科 0202100300100 <b>サンショウクイ</b> <i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles, 1822)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	VU

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長200mm。亜種サンショウクイは夏鳥として本州、四国、九州のごく一部に渡来。スマートな体形で尾は長め。雄は額、腮以下の体下面は白。頭頂から後頸は黒、背以下の体上面は灰色、風切、尾の一部は黒、外側尾羽はより外側へ行くほど短くて白い。雌は額の白色部が狭く頭頂から後頸も灰色。嘴と足は黒色。幼鳥は頭頂から背が灰褐色、羽先に小白斑。雨覆、風切の羽縁も白。ピーリーリー、ヒリリリリ等と鳴く。亜種リュウキュウサンショウクイは留鳥として中国地方、四国、九州、南西諸島に分布<sup>(20)</sup>。



提供：藤原 正徳(2014.9.8撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では2亜種を記録<sup>(3)</sup>。亜種サンショウクイは夏鳥として飛来し1990年と2000年の繁殖期の調査では内陸部でごく少数の生息だけで、さえざり以上の繁殖兆候は記録無し<sup>(45,46)</sup>。最新の調査では45メッシュで記録され繁殖も確認<sup>(4,81)</sup>。別亜種リュウキュウサンショウクイが2002年以降分布を拡大<sup>(82)</sup>。

### 選定理由

1990年と2000年の繁殖期現地調査で減少傾向が顕著。最新の調査では生息域は拡大傾向であるが生息域が局所的である。近年山口県内では2亜種が同所的に生息し両亜種の競合関係が懸念される<sup>(82)</sup>。

### 減少等の要因

雑木林や広葉樹林等の森林性の鳥であり森林の伐採やスギ・ヒノキ等の植林による針葉樹林化等、環境変化で減少している。越冬地である東南アジアや中継地でも大規模な森林伐採で生息環境が悪化。

- 148 -

スズメ目 カササギヒタキ科 0202100600100 <b>サンコウチョウ</b> <i>Terpsiphone atrocaudata</i> (Eyton, 1839)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長 雄は約445mm、雌は175mm。雄の中央尾羽はととても長く、頭部と胸、脇が紫黒色で、背は紫黒褐色、尾は黒い。嘴の目の外縁はコバルト色で、腹は白い。雌の尾は雄より短く、頭部の黒色や目の外縁の色も淡く、背と尾は橙紫褐色。雄の若鳥の尾が短い。チーチョ、ホイホイホイという口笛のような鳴き声でさえざり<sup>(23)</sup>、鳴き声で存在に気付くことが多い。雌も雄のようにさえざることがある。



提供：藤原 正徳(2007.6.25撮影)

### 生息・生育状況

夏鳥として本州以南の低地から山地の良く茂った林に渡来する。山口県では宇部市や山口市、下関市、萩市などの内陸部での観察記録が多い。繁殖は自然林やスギなどの人工林で行う。

### 選定理由

減少傾向は見られないが、生息地が限られており繁殖個体数は少ない。

### 減少等の要因

越冬地である東南アジアなどの大規模な森林伐採などの環境破壊が一因と思われる。また、姿態が美しいため、密猟の対象やマナーの悪いカメラマンに営巣妨害されることがある<sup>(83)</sup>。

- 149 -

スズメ目 ツリスガラ科 0202101000100 <b>ツリスガラ</b> <i>Remiz pendulinus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 -

**形態・生態**

【執筆者：寺本 明広】

全長110mm。嘴の先は鋭くとがる。雄は頭が灰色で、白い眉斑と黒い過眼線が目立ち、背は赤褐色。雌は頭も過眼線も褐色味がある。地鳴きはチーチーという細い声で鳴き、チーチーチーチーと続けることもある。日本には冬鳥として渡来し、水辺に近いヨシ原や草原に生息する。群れをつくって生活し、ヨシの茎に縦に止まり、嘴で茎の鞘を剥いで中の虫を探するためパチパチと音がする。繁殖地では、湿地や林縁の枝に草を使って吊り巣をつくる<sup>(23)</sup>。



提供：寺本 明広(2016.11.17撮影)

**生息・生育状況**

ユーラシア大陸に広く分布し、国内では冬鳥として本州中部以南の河口、川岸、海岸のヨシ原に渡来する<sup>(23)</sup>。2015-2016年に実施された山口県内における越冬期の生息調査では、7メッシュで確認され、瀬戸内側の記録が多い。

**選定理由**

生息地となるヨシ原は開発などの影響を受けやすい。山口県内で実施された越冬期の調査では、2000年の4メッシュから増加しているが、瀬戸内側の記録が主で、分布が局所的である。

**減少等の要因**

生息環境となるヨシ原は乾燥化による遷移や宅地化、河川改修などの開発で全国的に減少しており、安定した生息地を残していくことが課題である。

スズメ目 シジユウカラ科 0202101100100 <b>コガラ</b> <i>Poecile montanus</i> (Conrad von Balenstein, 1827)	カテゴリ	
	山口県	2018 NT
		2002 NT
	環境省	2019 -

**形態・生態**

【執筆者：小林 繁樹】

全長約125mm。ハシブトガラに似るが嘴は細い。額から後頭はやや褐色を帯びた黒色で光沢はない。背から腰、上尾筒は少し褐色を帯びた灰色。尾羽は暗灰褐色で灰色の羽縁。腮と喉は黒色。頬、耳羽、頸側は白。胸から下尾筒は汚白色で、腹と脇はバフ色を帯びる。風切は暗灰褐色で灰色の羽縁。嘴は黒、足は灰色。ツツツ、ジャージャーと地鳴きし、ピピーピピーという柔らかい声でさえざる。朽ち木に自分で穴を掘ってその中に藓類、樹皮、広葉樹の葉等を敷いて皿型の巣をつくり5-9個を産む。卵は白色の地に淡紫色と赤褐色の小斑<sup>(19)</sup>。



提供：小林 繁樹(2016.1.4撮影)

**生息・生育状況**

留鳥として九州以北の低山から亜高山の林に生息する。北海道では平地の林にも生息<sup>(20)</sup>。山口県では島根・広島県境付近の山地から山口県東部の山地で留鳥として記録<sup>(45,46)</sup>されていたが、2016-2017年の繁殖期の現地調査では従来の分布域にくわえ、山口県中央部の山地でも生息確認された。

**選定理由**

生息域が限られ個体数も多くない。ブナ林の様な自然林が減少し生息環境が悪化している。山口県内では今までに家族群、巣材運び等の記録はあるが、確実な繁殖確認の記録はない<sup>(4,45,46)</sup>。

**減少等の要因**

自然度の高い山地での林道建設や風力などの再生可能エネルギー施設の建設、スギ・ヒノキなど植林増加等に伴う天然林の減少で、生息域の縮小や環境悪化が考えられる。



スズメ目 シジユウカラ科 0202101100300 <b>ヒガラ</b> <i>Periparus ater</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長約110mm。シジユウカラ類では最小で<sup>(52)</sup>、スズメより小さい<sup>(53)</sup>。雌雄は同色で、頭部は黒く短い冠羽がある。シジユウガラに似るが、ネクタイ状の黒い縦斑はない。またさえずりはシジユウカラより早く高音でツピン、ツピンやツーピン、ツーピンと早口で繰り返す<sup>(52)</sup>。常に枝先の葉の中を移動して昆虫やクモなどを捕らえる他、植物の実を食べる<sup>(54)</sup>。繁殖期にはつがいで生活するが、冬季にはエナガ、キクイタダキや他のカラ類と混群を形成する<sup>(53)</sup>。繁殖期は樹洞や樹木の裂け目に苔や獣毛で椀型の巣をつくる。



提供：寺本 明広(2013.7.8撮影)

### 生息・生育状況

日本では留鳥または漂鳥として屋久島以北に生息する。山地や亜高山帯の針葉樹林を好むが、冬季は標高の低い場所に移動する<sup>(52)</sup>。山口県では、繁殖期は山口市阿東町や岩国市北部、周南市北部など主に標高400m以上の山地に生息し、越冬期は標高200m以下の場所でも観察される。

### 選定理由

山口県東北部の標高800-1000m近くの山地を中心に繁殖と越冬が確認されているが、数は少ない。また以前は冬期市街地、例えば山口市内でもよく見られたが、近年は見る機会が少ない<sup>(22,42)</sup>。

### 減少等の要因

標高の高いところに生息することから気温の影響を受けやすい種と考えられる。このため今後も気候変動による環境変化の影響が懸念される<sup>(84)</sup>。

- 152 -

スズメ目 ヒバリ科 0202101300300 <b>ヒバリ</b> <i>Alauda arvensis</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：小林 繁樹】

全長170mm。額から頭上、後頸、背、肩羽、腰、上尾筒は淡黄灰褐色、各羽には黒褐色の軸斑がある。後頭の羽毛はやや長くて冠羽状。尾羽は黒褐色で中央尾羽には黄褐色の羽縁、外側尾羽の外弁は白い。眉斑は白、頬と耳羽は黄褐色で黒の縦斑があり、喉は白色。胸、胸側、脇は淡黄褐色、胸と胸側には黒褐色の縦斑。腹と下尾筒は白。風切は黒褐色で黄褐色の羽縁、次列風切の先端は白。大雨覆と中雨覆も黒褐色で黄褐色の羽縁。嘴は黒褐色、足は黄褐色。繁殖期はなわばり上をさえずりながら飛ぶ。草の根元に皿形の巣。普通4卵<sup>(19)</sup>。



提供：小林 繁樹(2017.5.26撮影)

### 生息・生育状況

九州以北で繁殖し、北日本や積雪地のものは、冬、暖地へ移る<sup>(19)</sup>。山口県内には留鳥として生息し、瀬戸内側に生息、繁殖記録が多いものの、秋吉台など内陸部の山地や日本海側の平野部にも生息する。島嶼部では豊北町角島や萩市大島でさえずりが記録されている<sup>(45,46)</sup>。

### 選定理由

過去の繁殖分布調査<sup>(45,46)</sup>で、山口県内における繁殖期の生息分布の縮小傾向が顕著で生息環境も悪化している<sup>(6)</sup>。最新の調査でも繁殖確認メッシュは2000年より少ない12→11メッシュであった。

### 減少等の要因

低地から山地の草原、畑、草のある河原や海岸等の環境に生息<sup>(19)</sup>するが、これ等の場所が商業施設の建設や宅地化、太陽光等の再生可能エネルギー施設の建設で、生息・営巣環境が減少している。

- 153 -

スズメ目 ムシクイ科 0202101800900 <b>センダイムシクイ</b> <i>Phylloscopus coronatus</i> (Temminck & Schlegel, 1847)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

**形態・生態**

【執筆者：渡邊 徹】

全長130mm。雌雄同色。頭部から背、肩にかけては緑色みの強いオリーブ色。喉から胸は白く、脇や腹からの体下面は黄色みを帯びる。眉斑は白くて目立ち、頭頂部には汚白色の頭中央線がある。嘴は黒褐色で、下嘴は橙黄色。足は肉褐色。雄は繁殖期にチヨチヨビーとさえずる<sup>(24)</sup>。



提供：渡邊 徹(2015.9.13撮影)

**生息・生育状況**

極東地域と中国南部の内陸部で繁殖する。日本では九州以北で繁殖する夏鳥で、平地から山地の落葉広葉樹林に生息する。越冬地は東南アジア<sup>(24)</sup>。春と秋の渡りの時期には各地の平地でも見られる。

**選定理由**

かつては里山でふつうに繁殖する鳥であったが、現在では数が減っている。

**減少等の要因**

繁殖に適した広葉樹林が減少していることと、越冬地の東南アジアにおける環境悪化や狩猟の影響も懸念される<sup>(62, 63)</sup>。

スズメ目 ヨシキリ科 0202102100100 <b>オオヨシキリ</b> <i>Acrocephalus orientalis</i> (Temminck & Schlegel, 1847)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

**形態・生態**

【執筆者：渡邊 徹】

全長180mm。雌雄同色。成鳥は頭部から背、尾にかけてが灰褐色で、額から頭頂や翼、尾はやや暗色。喉からの体下面は白っぽい。胸から脇にかけては淡褐色みを帯びる。顔には汚白色の眉斑がある。嘴は黒い。幼鳥は頭部からの上面が茶色みを帯び、眉斑や喉からの体下面は黄褐色。雄は繁殖期にギョギヨシギヨシ ケシケシケシと大声でさえずり、夜もさえずる<sup>(24)</sup>。



提供：渡邊 徹(2012.6.11撮影)

**生息・生育状況**

九州以北の日本で繁殖する夏鳥で、他の繁殖地は朝鮮半島と中国中北部。越冬地は東南アジア<sup>(24)</sup>。主にヨシ原に営巣し、ヨシ原への依存度が高い。

**選定理由**

かつてはヨシ原で普通に繁殖する鳥であったが、減少している。

**減少等の要因**

ヨシ原が形成されるような低湿地は開発が進み、面積がかなり減少している。また越冬地の環境悪化や狩猟の影響も懸念される<sup>(62, 63)</sup>。

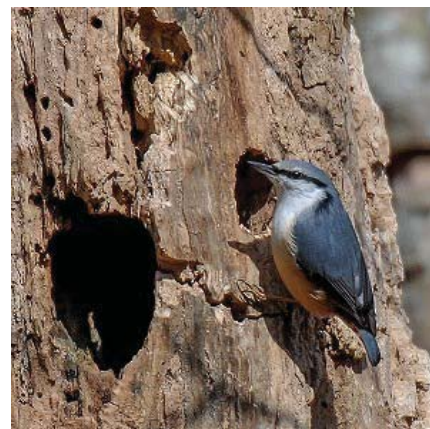
スズメ目 ゴジュウカラ科 0202102400100 <b>ゴジュウカラ</b> <i>Sitta europaea</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長140mm、雌雄ほぼ同色。頭部から上面が青灰色、黒い過眼線がある。頬からの体下面は白、脇と下尾筒は赤褐色。雄は雌より脇や下尾筒の色が濃い。外側尾羽には白斑。嘴は黒くてやや上に反って見え下嘴基部が鉛色。足は赤黒色。木に垂直に止まり体を逆さにして幹を回りながら降りてくる習性がある。さえずりはフイフイとよく通る声。3亜種があり北海道の亜種シロハラゴジュウカラは他の2亜種より上面がやや淡色、体下面全体が白い。本州、隠岐、四国、九州北部に亜種ゴジュウカラ、九州南部に亜種キウシュウゴジュウカラが分布<sup>(20)</sup>。

### 生息・生育状況

留鳥として九州以北の低山から亜高山の落葉広葉樹林に生息する。北海道では平地にもすむ<sup>(20)</sup>。山口県内では標高1000mから上の落葉広葉樹林に極わずかに生息し、岩国市錦町寂地山、山口市徳地、周南市長野山で記録がある。1984年山口市で幼鳥への給餌が観察されているが、他に繁殖記録はない<sup>(45,46)</sup>。



提供：藤原 正徳(2010.1.23撮影)

【執筆者：小林 繁樹】

### 選定理由

山口県境付近の標高1000m程の山地、寂地山系等数ヶ所での記録だけで生息域が狭く生息数も少ない<sup>(45,46)</sup>。最新の調査では以前の調査時に幼鳥への給餌が確認された山口市では記録されなかった。

### 減少等の要因

生息環境の悪化の他、元々生息域が山口県境付近の山地数ヶ所に局限、分断され個体数も少ない事で各山域での個体群維持が困難と思われる、山口市では生息していた個体群が消失した可能性有り。

- 156 -

スズメ目 ミソサザイ科 0202102600100 <b>ミソサザイ</b> <i>Troglodytes troglodytes</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	-
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長105mm<sup>(23)</sup>。国内最小の鳥の一つである<sup>(23,43,44)</sup>。体は丸くて嘴は細く、短い尾を上げている<sup>(23)</sup>。体は褐色で黒い横斑や灰白色の斑点がある<sup>(23)</sup>。眉斑は不明瞭<sup>(23)</sup>。全国に繁殖分布する<sup>(43,44)</sup>。低山帯から亜高山帯まで幅広く生息し、苔むした倒木や岩石で林床が複雑に入り組んだ溪谷や沢筋に多い<sup>(43,44)</sup>。岩のくぼみなどの少し暗くなった場所に苔を集め、側面に入出口のある球形(壺形)の巣をつくる<sup>(60)</sup>。繁殖期は4-7月、一腹卵数3-6個<sup>(43,44)</sup>。冬は低地にもいる<sup>(23)</sup>。ユーラシアと北アメリカの中緯度地方で広く繁殖する<sup>(43,44)</sup>。

### 生息・生育状況

山口県内で繁殖期は岩国市錦町や山口市徳地など県東部の山地に分布が集中し、中にはさえずりや造巣も確認された<sup>(45,46)</sup>。近年は生息が他地域でも確認され、越冬期は山地のみならず海岸沿いの林などでも確認され記録数は増加した<sup>(45,46)</sup>。越冬期の地鳴きと物陰での姿の確認は難しく留意が必要である。



提供：木下 淳美(2018.3.16撮影)

【執筆者：弘津 聖也】

### 選定理由

山口県内では繁殖期に県東部の山地に分布が集中し、繁殖行動も確認された<sup>(45,46)</sup>。冬期は海岸沿いの林など低地でも越冬している。

### 減少等の要因

繁殖期は山地で、越冬期は山地のみならず低地でも過ごすことが県内の記録数の増加で見えてきたが、県内の分布実態はまだ不明な点が多い。

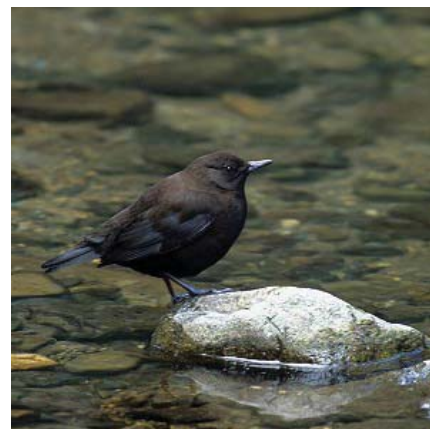
- 157 -

スズメ目 カワガラス科 0202102800100 <b>カワガラス</b> <i>Cinclus pallasii</i> Temminck, 1820	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長220mm。雌雄同色。全身が黒褐色で、脚は銀灰色。まぶたが白く眼を閉じると目立つ。幼鳥では体に白色の点がある。溪流や山地の湖などで生活し、水に潜って昆虫などをとる。水の上を流れに沿って速く低く飛ぶ<sup>23</sup>。繁殖期はピーイチュチュピツピツチュイチュイという声でさえずり、ふだんはビツという地鳴きをする<sup>38</sup>。繁殖期は冬に始まり、岩や橋の下などの隙間などで、大量のコケ類を使用して、側面に入りのあるボール形の巣をつくる<sup>23,39</sup>。



提供：藤原 正徳(2003.11.23撮影)

### 生息・生育状況

鹿児島県屋久島以北の山麓から山地の溪流や湖畔に留鳥として生息する<sup>23</sup>。2016年から2017年にかけて山口県内で実施された生息調査では、山口県の中部から東部にかけての内陸部で、生息確認や繁殖記録が多い。

### 選定理由

山口県内の分布は局所的で、山間部は開発などの影響による生息環境の減少により、生息数の減少のおそれがある。

### 減少等の要因

生息環境となる山地の溪流は、河川改修やダム建設、道路工事などの影響を受けやすく、生息状況に影響を与えていると考えられる。

- 158 -

スズメ目 ヒタキ科 0202102900200 <b>トラツグミ</b> <i>Zoothera dauma</i> (Latham, 1790)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：開作 秀敏】

全長295mm、日本のツグミ類の中で最大である。上面は黄褐色の地に黒色の細かい三日月斑があり、喉から腹部にかけては黄白色の地に黒色の三日月斑がある。翼は褐色で飛ぶと裏面には黒色の帯がある<sup>6</sup>。全国の平地から低山の落葉広葉樹や雑木林に生息し、繁殖する。繁殖期は4-7月頃で樹の叉上で営巣する。夜間から早朝にかけてヒー、ヒョーと口笛に似た声で鳴く。北日本や山地のものは秋から冬にかけて暖地や低地に移動し、地上でミミズなどを捕食する。市街地の公園や人家の庭などにも訪れる<sup>23</sup>。



提供：渡邊 徹(2014.3.4撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では冬期において日本海側から瀬戸内海側までの畑、水田、休耕田、公園などの平地で多く観察されているが、低山での観察記録もある。繁殖期では県中部から県東部の標高の高い地域での観察が多く、いずれもさえずりによる記録であるが、山口市の山地で家族群や餌運びが観察されている。

### 選定理由

生息は主に標高の高い山地に限られ、局所的である。森林開発に伴い生息場所が減少し、個体数も減少している。

### 減少等の要因

林道や再生可能エネルギー施設の建設、人工林増加などに伴う天然林伐採や環境破壊による、生息地の減少や環境悪化が考えられる。

- 159 -

スズメ目 ヒタキ科

0202102900400

### クロツグミ

*Turdus cardis* Temminck, 1831

#### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

#### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長215mmで、大型ツグミ類の中では小さい。雄は頭部、胸、背、翼、尾が少し灰色実のある黒色で、腹は白くて上腹部と脇には黒い三角斑が並らぶ。嘴と目の外縁は黄色である。雌は上面が茶褐色で、下面は白く、胸側から脇は橙黄赤色で黒い顎線と黒い黒色斑がある<sup>(23)</sup>。平地または低山の針葉造林地、落葉広葉樹林に生息し、地上で昆虫、ミミズなどを採食するほか、樹上で木の実も食べる。繁殖期には高い枝に止まり、朗らかな声でさえずる。枝の上で主に蘚苔類で碗形の巣を作り、4-8月に卵を3-4個産み、雌だけが抱卵する<sup>(41)</sup>。



提供：村本 和之(2006. 4. 22撮影)

#### 生息・生育状況

夏鳥で九州以北の日本と中国中部の山地に繁殖分布する<sup>(41)</sup>。山口県では山口市や美祢市などの標高500m程度以上の場所で繁殖が記録されている。

#### 選定理由

2000年以降の繁殖期に確認されたサブメッシュ数は40であり、1999年以前の18に比べて減少傾向は認められない。

#### 減少等の要因

個体数は少ないものの、減少はしていない。

スズメ目 ヒタキ科

0202102901200

### コマドリ

*Luscinia akahige* (Temminck, 1835)

#### カテゴリ

山口県	2018	NT
	2002	NT
環境省	2019	-

#### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長140mm。頭から背、尾にかけて赤褐色。顔から胸は鮮やかな橙褐色で、腹部は白色。雄は胸部と腹部の境は黒色の帯があるが、雌はこの黒色が無く全体に淡色<sup>(53)</sup>。夏鳥として北海道から九州に飛来する<sup>(52)</sup>。亜高山帯の針葉樹林の中でも笹や下草の茂った暗所を好む<sup>(53)</sup>。昆虫類を主な餌にしている繁殖期にはつがい縄張りを持ち、雄は倒木の上や下枝に止まって声量のある声でさえずる<sup>(54)</sup>。ヒンカラカラカラという馬のいななきのようなさえずり方が和名の由来<sup>(52)</sup>。



提供：豊田 敏則(2018. 4. 13撮影)

#### 生息・生育状況

渡りの時期の4月中旬から5月にかけては、瀬戸内の沿岸部や山間部でも鳴き声を聞くことがある。山口県内での記録の多くは、こうした渡りの時期のものであるが、比較的標高の高い山地では繁殖期にさえずりが聞かれることがあり繁殖の可能性はある。

#### 選定理由

本種は標高(気温)や森林の分布の影響を受けると推測される。山口県内には生息に適した標高1500m以上の高い山地がないため、生息記録は少ない(46)。

#### 減少等の要因

九州ではニホンジカの密度増加と採食によりコマドリの生息地のスダケが広範囲で枯死して数を減らしており<sup>(85)</sup>、山口県内でも早い時期に生息環境の保全をはかる必要がある。

スズメ目 ヒタキ科 0202102901500 <b>コルリ</b> <i>Luscinia cyane</i> (Pallas, 1776)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長140mm、雄は頭部、背、尾までの上面が暗青色で、眼先から頬、側胸は黒色である。下面は白い<sup>6)</sup>。雌は頭部から背面までがオリーブ褐色で腰から尾には少し青みがある。下面は淡いオリーブ色で胸側は褐色味がある<sup>23)</sup>。夏鳥として主に本州中部以北の平地から亜高山帯の落葉広葉樹林や混合林に渡来し、下草や低木が多く生える場所で生息、繁殖する。西日本では標高1000m前後の深い森で少数繁殖している<sup>6)</sup>。主に林床や地上近くで行動し、昆虫類、クモ類、ミミズ類などを捕食する。

【執筆者：開作 秀敏】



提供：藤原 正徳(2013. 5. 1撮影)

### 生息・生育状況

山口県内では春と秋の渡りの時期に観察できる。春は平地の林でもさえずりを聞くことができ、秋は公園などの林床でも観察できる<sup>6)</sup>。主に島嶼部や沿岸部での記録の他、東鳳凰山、寂地山、深谷渓谷などで観察記録がある。寂地山など標高が高いところでは繁殖期にさえずりが聞かれ、繁殖の可能性もある。

### 選定理由

生息確認数が少なく、生息域も局所的である。

### 減少等の要因

宅地、道路造成等の開発により、渡り中継地などの生息環境の減少、悪化が考えられる。

- 162 -

スズメ目 ヒタキ科 0202102903000 <b>コサメビタキ</b> <i>Muscicapa dauurica</i> Pallas, 1811	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長約130mm。額から頭、背、腰、上尾筒は灰褐色で尾は濃灰褐色。目先と目の周りは白、頬と耳羽は灰褐色。腮、喉、腹は白。胸と脇は淡い灰褐色。翼は濃灰褐色で灰褐色の羽縁がある。嘴は黒褐色、下嘴の基部は灰色。幼鳥の頭や背にはバフ色の点々があり大雨覆にも白色の斑点がある。明るい落葉広葉樹林にすみ樹冠部の空間で飛んでいる昆虫を捕っている。低山帯の林で主に繁殖し地上2.5-6mの横枝にコケ類と樹皮を主に使って皿形の巣をつくり外装としてウメノキゴケを貼り付ける。1巣卵数3-5個、卵は淡青緑灰色無斑<sup>19)</sup>。

【執筆者：小林 繁樹】



提供：木下 淳美(2016. 9. 10撮影)

### 生息・生育状況

山口県では春、秋の渡り時期には海岸近くの林などで見ることが多いが、繁殖期の生息記録は少なく、繁殖確認記録は1973年山口市<sup>22)</sup>、1993年岩国市錦町<sup>86)</sup>、2016年山口市<sup>4, 87)</sup>などわずかである。

### 選定理由

夏鳥として飛来し落葉広葉樹の林等で繁殖するが、山口県内では2016-2017年の繁殖期の現地調査では生息確認数が少なく、生息域も局所的で、繁殖兆候の確認はわずかに6メッシュである。

### 減少等の要因

元々山口県内での生息・繁殖状況が脆弱な上に、道路建設や風力・太陽光等再生可能エネルギー施設建設、スギ・ヒノキ等の人工林増加等に伴う天然林の減少で生息域の縮小や環境が悪化した。

- 163 -

スズメ目 ヒタキ科 0202102903600 <b>オオルリ</b> <i>Cyanoptila cyanomelana</i> (Temminck, 1829)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長165mm。雄は頭から背が青紫色、翼と尾羽は黒くて青い羽縁があり、外側尾羽の基部は白い。喉・顔・胸・脇は黒く、腹が白い。雌は上面が茶褐色で尾羽に少し赤褐色味がある。雄の若鳥は腰・翼・尾羽は青くなるが、頭部や背と胸は雌のような茶褐色。地鳴きはクックツまたはタツタツと鳴く。ピーピーピーピージジッなどゆっくり美声で、梢や突出した枯れ枝などに止まってさえずる。雌もさえずりに似た声を出す。繁殖場所として溪流沿いの林を好み、崖の棚、木の根元、建造物などに多量のコケ類を使って、お椀形の巣をつくる<sup>(23, 38, 39)</sup>。

### 生息・生育状況

夏鳥として中国東北部や朝鮮半島、国内では九州以北の低山から山地に渡来し、冬期には東南アジアへ渡る<sup>(23)</sup>。山口県内では、溪流や森林で広く繁殖記録がある。



提供：藤原 正徳(2018.5.3撮影)

【執筆者：寺本 明広】

### 選定理由

山口県内では広く繁殖が確認されているが、山間部の開発などの環境変化が生息状況に影響を与えるおそれがある。

### 減少等の要因

道路建設や河川改修といった開発による生息地の減少が個体数に影響を与えるおそれがあり、環境変化や個体数の動向に注視していく必要がある。

- 164 -

スズメ目 ホオジロ科 0202103600400 <b>ホオアカ</b> <i>Emberiza fucata</i> Pallas, 1776	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

全長160mm。雄は頭が灰色で、頬は赤褐色、下面は白くて胸に黒と褐色の2本の横帯がある。雌は全体的に色が鈍い。冬羽では頭が灰褐色となり、下面もバフ褐色となる。地鳴きはチツ、チツと鳴く。さえずりはホオジロよりも短くて濁り、チョッチチリンジやチチョチュビなど<sup>(23)</sup>。生息環境は平地から山地の草原や川原、農耕地など<sup>(68)</sup>で、低木の枝上や地上で営巣し、細長い枯れ草を使って、編むようにしてお椀形の巣をつくる<sup>(39)</sup>。



提供：寺本 明広(2015.5.26撮影)

【執筆者：寺本 明広】

### 生息・生育状況

北日本では平地の草原、本州中部以南では高原での繁殖が多く、越冬期になると、北日本では多くが渡去し、西日本に多くなる<sup>(23)</sup>。山口県の繁殖記録は秋吉台の草原や瀬戸内側の干拓地や農耕地が主である。

### 選定理由

生息地となる草原や農耕地といった環境は開発などによる影響を受けやすく、全国的に減少傾向にあり、生息数の減少につながるおそれがある。

### 減少等の要因

生息地となる草原や農耕地は宅地化や圃場整備といった開発の影響を受けやすい。また、草原の環境は時間の経過とともに森林へと移行していくため、今後の環境変化に注目していく必要がある。

- 165 -

スズメ目 ホオジロ科 0202103601400 <b>クロジ</b> <i>Emberiza variabilis</i> Temminck, 1836	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	NT
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：立野 昌宏】

全長約170mm。雄は全身が濃い青灰色で背、雨覆には明瞭な黒い縦斑がある。若鳥は背や風切が褐色を帯びる。雌は頭部が褐色で、頭側線と頬を囲む線はこげ茶色。背はオリーブ褐色で、黒い縦斑がある<sup>(52)</sup>。国外ではサハリン、千島列島、カムチャッカ半島南端だけに分布する東アジア特産種。北海道では夏鳥、本州北部では漂鳥または冬鳥、笹などの下草が密生した針葉樹と落葉樹の混交林や、落葉樹林の疎林などに生息して、冬季は平地に移動する。本州南部以南では冬鳥<sup>(53)</sup>。雑食性で昆虫類、種子などを食べる<sup>(52)</sup>。



提供：藤原 正徳(2011.1.19撮影)

### 生息・生育状況

冬季は暖地の低山帯かそれ以下の雑木林、竹藪などに生息するが、藪の中にいることが多いので目立ちにくい。山口県内では、冬季に瀬戸内海側の平野部で見られることもあるが、繁殖期にはさえずりや枝移りする姿がまれに確認される程度である。

### 選定理由

繁殖の可能性はあるが、極めて数が少ない。

### 減少等の要因

主に北海道や本州中北部の日本海側で繁殖するため、もともと数は多くないと思われるが、鳥取県では繁殖が確認されており<sup>(88)</sup>、注意深く観察する必要がある。

- 166 -

スズメ目 ホオジロ科 0202103601700 <b>オオジュリン</b> <i>Emberiza schoeniclus</i> (Linnaeus, 1758)	カテゴリ		
	山口県	2018	NT
		2002	-
	環境省	2019	-

### 形態・生態

【執筆者：寺本 明広】

全長160mm。雄の夏羽は黒い頭部と喉の間に白い頬線があり、後頸は白くて背には赤褐色に黒とバフ色の縦斑があり、翼は雨覆の赤褐色が目立つ。腰は灰褐色。下面は白い。雌はバフ色の眉斑と頬線があり翼と腰は雄と同様。下面は淡灰褐色で、脇には褐色の縦斑がある。雄の冬羽は雌に似ている。ヨシ原に生息し、ヨシの茎に縦に止まり、茎の葉鞘を剥がして下の昆虫をとる<sup>(23)</sup>。さえずりにはゆっくりとしたテンポのチツチエチチヨという声と、早口でチュイチュイチュチュチュイと鳴く声の二つがある。地鳴きはチュイやチュインという声<sup>(38)</sup>。



提供：寺本 明広(2014.11.5撮影)

### 生息・生育状況

国内では東北以北の湿原で繁殖し、冬期は主に本州中部以南の低地のヨシ原に渡る<sup>(23)</sup>。山口県内における越冬期の生息調査では、2000年では瀬戸内側の記録が主であったが、最新の調査では日本海側でも確認されている。

### 選定理由

山口県内では多く確認されているが、生息地となるヨシ原は全国的に減少傾向にあり、生息数に影響を与えるおそれがある。

### 減少等の要因

主な生息地となる平野部のヨシ原は、宅地化や河川改修、道路建設などの開発の影響を受けやすく、今後の生息数の動向が注目される。

- 167 -



ミズナギドリ目 ウミツバメ科 0200600200100 <b>ヒメクロウミツバメ</b> <i>Oceanodroma monorhis</i> (Swinhoe, 1867)	カテゴリ	
	山口県	2018 DD
		2002 CR
	環境省	2019 VU

#### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長190mm。全身くすんだ黒褐色で白色部はない。翼の上面には淡色帯がある。翼は比較的短く、尾の切れ込みは浅い<sup>(23)</sup>。東北～九州、伊豆諸島などの島で繁殖する。その周辺の海域で見られる<sup>(23)</sup>。産卵は5-6月とされるが、福岡県沖ノ島では7月下旬に抱卵、8月10日に雛が観察された例がある<sup>(41)</sup>。

NO IMAGE

#### 生息・生育状況

朝鮮半島や台湾周辺の島々、日本では京都府沓島、島根県隠岐、福岡県沖ノ島などで繁殖している。山口県での最近の観察記録は2001年5月の萩市見島～萩航路の1例のみである。

#### 選定理由

東北地方や日本海の島で繁殖するが、山口県内での繁殖状況はわかっていない。

#### 減少等の要因

不明

- 168 -

スズメ目 モズ科 0202100700300 <b>アカモズ</b> <i>Lanius cristatus</i> Linnaeus, 1758	カテゴリ	
	山口県	2018 DD
		2002 NT
	環境省	2019 EN

#### 形態・生態

【執筆者：村本 和之】

全長200mmで額は白く、頭から尾までが赤褐色、翼は黒褐色で茶褐色の羽縁がある。眉斑は白くて過眼線が黒く、喉以下の下面は白く脇は橙黄色を帯びる。雌には脇に褐色波状斑のある個体がいる<sup>(23)</sup>。枯れ枝や電線でギチギチギチと鳴く。一般習性はモズに似ているが、飛翔昆虫を捕食することが多い。茂みに枯れ茎、つる、枯れ葉などで皿形の巣を作り、青緑灰白色の地に斑点がある卵を4-7個産む<sup>(41)</sup>。



提供：藤原 正徳(1998.5.5撮影)

#### 生息・生育状況

夏鳥でアジア東部に分布する。低木のある草原、明るい林、林縁の低木林、公園などに生息する。山口県では2000年以降、岩国市羅漢山、萩市見島などでの観察記録がある。

#### 選定理由

本種は全国的に分布の縮小が著しい種として挙げられている<sup>(69)</sup>。山口県においても2000年以降の繁殖期に確認されたサブメッシュ数は2で、1999年以前の10に比べて減少が顕著である。

#### 減少等の要因

不明

- 169 -

## 鳥類 参考・引用文献一覧

- 1 山口県自然研究会(編) (1965). 山口の自然. 六月社
- 2 小林繁樹・原田量介・山根和親・開作秀敏・村本和之・立野昌宏・弘津聖也 (2017). 山口県産鳥類目録 2017. 山口野鳥. 48, 日本野鳥の会山口県支部. pp.69-111.
- 3 小林繁樹・原田量介・山根和親・開作秀敏・村本和之・立野昌宏・弘津聖也 (2017). 山口県産鳥類目録(亜種) 2017. 山口野鳥. 48, 日本野鳥の会山口県支部. pp.112-146.
- 4 小林繁樹・原田量介・山根和親・開作秀敏・村本和之・立野昌宏・弘津聖也 (2017). 山口県産繁殖鳥類リスト 2017. 山口県の自然. 77, 山口県立山口博物館. pp.1-34.
- 5 小林繁樹・原田量介・山根和親・開作秀敏・村本和之・立野昌宏・弘津聖也 (2017). 山口県で記録された外来種(外来鳥)リスト. 山口県の自然. 77, 山口県立山口博物館. pp.35-62.
- 6 山口県 (2002). レッドデータブックやまぐち 山口県の絶滅のおそれのある野生生物. 山口県環境生活部自然保護課. pp.55-134.
- 7 小林繁樹・小川孝生・梶畑哲二・川元武・原田量介 (1999). 山口県産鳥類目録 1999. 山口野鳥. 32, 日本野鳥の会山口県支部. pp.50-92.
- 8 小林繁樹・小川孝生・梶畑哲二・川元武・原田量介 (2000). 山口県産鳥類目録補遺 2000. 山口野鳥. 33, 日本野鳥の会山口県支部. pp.49-65.
- 9 小林繁樹 (1999). 山口県産繁殖鳥類リスト 1999. 山口野鳥. 32, 日本野鳥の会山口県支部. pp.26-49.
- 10 小林繁樹・原田量介 (2000). 山口県産繁殖鳥類リスト補遺 2000. 山口野鳥. 33, 日本野鳥の会山口県支部. pp.42-48.
- 11 環境省 (2014). レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類. ぎょうせい.
- 12 烏田智庵 (1736). 周防国産物名寄.
- 13 著者不明 a (1831). 周防国風土記(風土注進案・防長風土記) 国立公文書館蔵. 大島郡宰判周防国大島風土記. 上関宰判周防国熊毛郡大島郡風土記.
- 14 著者不明 b (1831). 長門国風土記(風土注進案・防長風土記) 国立公文書館蔵. 船木宰判長門国厚狭郡風土記. 前大津宰判長門国大津郡風土記. 当島宰判長門国阿武郡風土記.
- 15 著者不明 c (1730年代) 周防国吉川左京領内産物並方言. 山口県立文書館蔵.
- 16 安藤健 (1984). トキの文献(その2). 応用鳥学集報. 4(1), 山階鳥類研究所. pp.8-27.
- 17 安藤健 (1987). トキの文献(その7). 応用鳥学集報. 7(1), 山階鳥類研究所. pp.15-29.
- 18 安藤健 (1988). トキの文献(その8). 応用鳥学集報. 8(1), 山階鳥類研究所. pp.49-53.
- 19 高野伸二 (1981). カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会.
- 20 真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014). 決定版 日本の野鳥 650. 平凡社.
- 21 山階鳥類研究所 (1975). この鳥を守ろう-それが人の生命をまもる. 霞会館.
- 22 日本野鳥の会山口県支部 (1976). 山口県の野鳥. 日本野鳥の会山口県支部.
- 23 高野伸二 (2015). フィールドガイド日本の野鳥(増補改訂新版). 日本野鳥の会.
- 24 真木広造・大西敏一 (2000). 決定版 日本の野鳥 590. 平凡社.
- 25 樋口広芳 (2012). ガン・ツル・ハクチョウはなぜ集まる?どこに集まる?. BIRDER. 26(2), 文一総合出版. pp.6-9.
- 26 小川孝生 (2001). 幕末御献上鶴資料について. 山口野鳥. 33, 日本野鳥の会山口県支部. pp.71-77.
- 27 小川孝生 (1984). 近世文書に見る鳥あれこれ. 山口野鳥. 17, 日本野鳥の会山口県支部.

pp. 43-44.

- 28 小川孝生 (2010). 幕末御献上鶴資料について(その2). 山口野鳥. 42, 日本野鳥の会山口県支部. pp.14-16.
- 29 吉積久年 (1989). 文化財ノート(7). 山口県文化財. 19, 山口県文化財愛護協会. pp.59-62.
- 30 吉積久年 (1994). 走りと盗みと差火、鶴と鯨 天和二・三年御留守居所日記を読む. 山口県文書館研究紀要. 21, 山口県文書館. pp.19-54.
- 31 小林繁樹 (2018). 江戸時代と現代のツル類の山口県内への飛来地の比較. 山口野鳥. 49, 日本野鳥の会山口県支部. pp.69-76.
- 32 富田宏 (2018). 危機に瀕する野鳥たち(2) ヘラシギ. BIRDER. 32(2), 文一総合出版. pp.42-43.
- 33 富田宏 (2016). “身近な”絶滅危惧の鳥たちの今 ヘラシギ. BIRDER. 30(3), 文一総合出版. pp.11.
- 34 富田宏 (2014). ミャンマーの漁業がヘラシギにもたらす影響とは?～自然環境と地域の人々の暮らしを守る～. BIRDER. 28(8), 文一総合出版. pp.33.
- 35 山本尚佳, 嶋田淑子・高島美登里 (2016). 山口県上関町海域(瀬戸内海西部)におけるカンムリウミスズメ家族群の確認と羽衣変化. 上関の自然を守る会.
- 36 中村浩志 (2004). 甦れ、ブツポウソウ. 山と溪谷社.
- 37 川路則友 (2006). 生態図鑑 ヤマドリ. バードリサーチニュース. 3(11), バードリサーチ. pp.4-5.
- 38 上田秀雄・叶内拓哉 (2014). 声が聞こえる!野鳥図鑑(増補改訂版). 文一総合出版.
- 39 小海途銀次郎・和田岳 (2011). 日本鳥の巣図鑑 小海途銀次郎コレクション. 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター(編). 東海大学出版.
- 40 山口県 (2017). 県道美祢油谷線環境調査報告書. 山口県長門土木建築事務所.
- 41 桜井良三 (1984). 決定版 生物大図鑑 鳥類. 世界文化社.
- 42 山口県立山口博物館 (1989). 山口県の野鳥ガイド. 山口県立山口博物館.
- 43 樋口広芳・山岸哲・森岡弘之 (1996). 日本動物大百科(3)鳥類Ⅰ. 平凡社.
- 44 樋口広芳 (1997). 日本動物大百科(4)鳥類Ⅱ. 平凡社.
- 45 日本野鳥の会山口県支部 (1990). 山口県版鳥類繁殖地地図調査報告書. 日本野鳥の会山口県支部.
- 46 日本野鳥の会山口県支部 (1990). 山口県版鳥類繁殖分布調査報告書 2000. 日本野鳥の会山口県支部.
- 47 桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2000). 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.
- 48 日本鳥学会 (2012). 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会.
- 49 山本健次郎・三宅貞敏 (1994). 光市牛島におけるカラスバトの生息状況と生態. 山口県立山口博物館研究報告. 20, 山口県立山口博物館. pp.1-25.
- 50 山本健次郎 (1998). シリーズ「この鳥を守ろう」の現在第34回カラスバトその2 光市牛島のカラスバトを中心に. 私たちの自然. 437, 日本鳥類保護連盟. pp.6-9.
- 51 渡辺伸一・上田健吾・飯田知彦 (2016). 瀬戸内海で繁殖するオオミズナギドリー山口県上関町宇和島一. 月刊 海洋. 48(9), 海洋出版. pp.415-420.
- 52 石田光史 (2016). ぱっと見わけ観察を楽しむ 野鳥図鑑. ナツメ社.
- 53 環境庁 (1981). 第2回自然環境保全基礎調査報告書資料編. 環境庁自然保護局企画調整課自然環境調査室.
- 54 高野伸二 (1985). 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社.
- 55 大塚啓子 (2011). 渡良瀬遊水地におけるヨシゴイの越冬記録. Accipiter. 17, 日本野鳥の会栃

木県支部.

- 56 日本クロツラヘラサギネットワーク (2018). 2017~2018 クロツラヘラサギ調査報告書. 日本クロツラヘラサギネットワーク.
- 57 高野伸二・柳澤紀夫 (1979). 野鳥図鑑. 日本鳥類保護連盟.
- 58 環境省自然環境局生物多様性センター・NPO 法人バードリサーチ (2015). モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター. 守屋年史・奴賀俊光(編). 環境省自然環境局生物多様性センター.
- 59 NPO 法人南港ウエットランドグループ・大阪市港湾局 (2016). 平成 27 年度「野鳥園臨港緑地干潟・湿地環境保全事業」事業報告書. NPO 法人南港ウエットランドグループ・大阪市港湾局.
- 60 小海途銀次郎 (2011). 決定版 日本の野鳥「巣と卵」図鑑. 世界文化社.
- 61 桑原和之 (2003). あのコアジサシのこんな危機. BIRDER. 17(6), 文一総合出版. pp.32-33.
- 62 遠藤公男 (2003). 「夏鳥たちの歌は、今」と「その後」. BIRDER. 17(6), 文一総合出版. pp.36-37.
- 63 内田博 (2003). 楽園の鳥 サンコウチョウ. BIRDER. 17(6), 文一総合出版. pp.34-35.
- 64 梅森龍史・東常哲也 (2007). 山口県萩市(旧旭村)におけるハチクマ *Pernis apivurus* の繁殖記録. 山口県の自然. 67, 山口県立山口博物館. pp.19-22.
- 65 村本和之 (2017). 山口県における野鳥のさえずり時期について-山口県野鳥観察データベースの解析-. 山口野鳥. 48, 日本野鳥の会山口県支部. pp.40-55.
- 66 島根県 (2014). 改訂 しまねレッドデータブック 2014 動物編 島根県の絶滅のおそれのある野生動物. 島根県環境生活部自然環境課.
- 67 開作秀敏 (2017). この冬、長門市にやって来た珍客たち. やまぐち野鳥だより. 249, 日本野鳥の会山口県支部. pp.10.
- 68 叶内拓哉 (2017). フィールド図鑑 日本の野鳥. 文一総合出版.
- 69 佐々木紘・弘中毅・澤田千晶 (1990). ケリの繁殖を確認. 山口県版鳥類繁殖地図調査報告書. 日本野鳥の会山口県支部. pp.306-307.
- 70 高野伸二 (1989). 野鳥を友に. 朝日新聞社.
- 71 三谷栄治 (2015). 萩市で記録したウミネコの新繁殖地. 山口野鳥. 47, 日本野鳥の会山口県支部. pp.61.
- 72 平野敏明 (2016). バードリサーチ 生態図鑑 (2016 年 2 月版). NPO 法人バードリサーチ.
- 73 阿蘇市 (2010). 阿蘇ペディア. 阿蘇市. (<http://mobilecc.asoict.jp/>), 2018/12/14.
- 74 加藤吉勝・矢次弥生 (2007). 大分県におけるノスリの岩壁繁殖記録. Strix. 25, 日本野鳥の会. pp.169-173.
- 75 五百澤日丸・山形則男 (2014). 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.
- 76 石原徹 (2012). オオコノハズクの保護事例. WRV ENWS LETTER. 83, NPO 法人野生動物救護獣医師協会. pp.8-9.
- 77 小林繁樹・深町修・藤井君子 (1999). オオコノハズクの山口県鹿野町での巣箱繁殖例. Strix. 17, 日本野鳥の会. pp.181-185.
- 78 松本哲矢 (2018). 南アルプス邑野鳥公園でのオオコノハズクの営巣報告. 株式会社生態計画研究所コラム・レポート. 生態計画研究所.
- 79 弘中毅 (2002). アカゲラの繁殖観察. 山口野鳥. 35, 日本野鳥の会山口県支部. pp.13-15.
- 80 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1995). 図鑑 日本のワシタカ類. 文一総合出版.
- 81 宮川輝夫・石崎哲夫 (2016). 亜種リユウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae*

- の繁殖記録. やまぐち野鳥だより. 248, 日本野鳥の会山口県支部. pp.12-13.
- 82 小林繁樹 (2018). 山口県におけるサンショウクイ 2 亜種の現状. 山口野鳥. 49, 日本野鳥の会山口県支部. pp.53-68.
- 83 京都府 (2015). 京都府レッドデータブック 2015. 京都府環境部自然環境保全課.
- 84 文部科学省・気象庁・環境省 (2013). 気候変動の観測・予測及び影響評価統合レポート. 日本の気候変動とその影響 (2012 年度版). 文部科学省・気象庁・環境省.
- 85 関伸一・安田雅俊・小高信彦・矢部恒晶 (2009). 増えた、減った、困った!九州・沖縄の野生動物をめぐる最近の研究. 九州の森と林業. 90, 森林総合研究所九州支所.
- 86 川本美千夫 (1993). コサメビタキ. 山口野鳥. 26, 日本野鳥の会山口県支部. アート頁.
- 87 宮川輝夫・石崎哲夫 (2016). コサメビタキ *Muscicapa dauurica* の繁殖記録. やまぐち野鳥だより. 248, 日本野鳥の会山口県支部. pp.14-16.
- 88 鳥取県 (2012). レッドデータブックとっとり 改訂版. 鳥取県生活環境部緑豊かな自然課.
- 89 神奈川県 (2006). 神奈川県レッドデータブック 2006 WEB 版. 神奈川県立生命の星・地球博物館・神奈川県自然環境保全センター. (<http://conservation.jp/tanzawa/rdb/>), 2018/12/14.